
あゝ皇国の零

瑞鶴

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あゝ皇国の零

【Nコード】

N1650H

【作者名】

瑞鶴

【あらすじ】

「ゼロの使い魔」との二次元作品です。要塞化された名も無き島の守備隊が島ごとハルケギニアに飛ばされてしまう。

プロローグ 主な登場人物（前書き）

最初にご警告いたします。

私はゼロの使い魔の原作を、一度も、読んだ事が
ございません、また軍事にもかなり詳しいというわけ
ではございませんねで変に思いうこともあるとは思ひ
ますがその辺はどうかお許し願ひします。

あと海軍航空隊が主体です。

プロローグ 主な登場人物

1943年夏、名前もないような島。

現地の日本軍はトラック諸島にある無名の島からトム島と読んでいた。

日本軍は油田と休憩基地の確保を狙い必ずこの島に連合軍が上陸してくると睨み

油田確保の為に大規模な輸送作戦が行われかなりの戦力をトム島へ送った。

しかし連合軍は攻めてくる事なく1945年、8月15日に向かってる。

無駄な島に大量の戦力を送り込んでいたにすぎなかった…

しかも戦争末期、トラック諸島と本土は完全に遮断されてしまい引き上げもできなかった。

これも日本軍の敗因の一つだろう…

しかし15日の夜中、ピカッと閃光が一瞬島を飲み込む。

翌日、気がついたら島の隣に大陸があった…

日本軍の戦力 -

日本軍はトム島を要塞化しておりかなりの兵がこの島にいた。

もつともそのせいで要塞を避けていた連合軍が上陸してこなかったのかもしれない。

人間：

陸軍1万8千 海軍7千

計：25000

戦車・装甲車・その他車両：

九五式軽戦車12両、九七式中戦車8

計：20両

艦艇：

戦艦2隻 巡洋艦3隻、駆逐艦5隻、空母1隻

計：11隻

航空機：

零戦（五二型が主力）120機 月光28機 九七艦攻27機 九

九艦爆5機 九六艦戦3機 九三中練30機

計：213機

隼65機 鍾馗15機 九九双軽20機 九七戦8機

計：108機

火砲：

13mm対戦車砲、105mm山砲ほか約200門

小銃506挺

軽機関銃200挺

重機関銃58挺

食糧：自活可能

主な登場人物 -

「海軍」

濱口健介：

海軍少尉、25歳、今回の主人公で初陣は中国戦線で19歳の時。操縦士暦6年で珊瑚海海戦やガダルカナル攻防戦、敵の輸送船の妨害など

数々の戦いに参加したベテラン。

操縦技術は彼の乗った零戦は無敵と言われるほどの腕前であった。

総撃墜数87機

五十嵐次郎

海軍飛行兵曹長、25歳、健介とは同期であり戦友である。

普段は真面目だが実は真性のロリコン。

総撃墜数23機

野々村隆志

海軍大尉、健介達が所属する戦闘三九飛行隊隊長。

総撃墜数53機

木下四郎

海軍中将、トム島に基地をおく第7艦隊司令官

「陸軍」

石原宗一郎

陸軍中将、トム島守備隊総司令官

当時の日本軍の中ではかわりもので古参の将校・士官達からは嫌われている。

辻吉宗

陸軍大佐、戦車隊長。

宗一郎の良き理解者。

その他…ゼロの使い魔の登場人物

日本兵など…

1話…ドコなんだよ…」コは

「…」

朝だ

いつもと変わらぬ朝だ。

もつとも日本は負けた。

俺たちもしばらくすれば連合軍に捕らえられるんだろう。

なんの為にこの島を要塞化したんだ軍は？

結局連合軍は上陸してこなかった。

外を見ると数百にも及ぶ航空機が並んでいた。

「濱口少尉」

声をかけてきたのは同期の五十嵐だ

「おう、五十嵐か」

「さわやかな朝ですね」

「おいおい俺たちは同期だせ？ 前から言ってるけど友達みたいなものだ、

敬語なんて堅苦しいぞ」

「いいえ、確かに同期で友みたいなものかもしれませんが

やはり自分と濱口少尉は軍人であり階級があるのです」

「それに自分は濱口少尉ほど戦果をあげてないですし、やはり濱口少尉は上官です」

「ハハッ そんなことはどうでもいいだろ、まあ俺も上官には頭があがらないけどな」

「ようお前ら、今日は早起きだな、どうせもう戦いはないだろうにな」

後ろから声をかけてきたのは濱口達の所属する戦闘三 九飛行隊隊長野々村隆志大尉だ。

「日本人たるもの早寝早起きです、いつでも戦えるようにですね」

「うむ、上からは自衛目的ならば戦闘を行ってもよいということらしいからな」

朝飯も食い終わり訓練を行いつつもどおり日が過ぎていく。

濱口は自分の愛機、零式艦上戦闘機五二型を眺める。

「どうしました濱口少尉？」

「ん？ ああ、最近こいつに乗って敵を落したことがないなと思ってな」

「まったく、やつらはこの島の油田も狙わず休憩するにはちょうどいい島なのに
それすら狙わずなにを考えてるんでしょうね」

当時連合軍は飛び石作戦を行っていた。

日本軍が要塞化した島を避け日本軍の戦力があまりなくかつ戦略上重要な場所のみを

占領していく作戦でありこれにより本土との補給線が遮断された。

だがこの島の守備隊はこの所ずっと戦闘を行っておらず武器、弾薬はあまりにあまり

さらに油田もあるので燃料にも困らなかった。

そんな事を語っていると昼も過ぎ昼飯を食い終わった頃であった。偉そうな人たちがあゝいてきた。

一人は「トム島海軍航空隊」と呼ばれる戦闘289、戦闘299戦闘309 戦闘319を

一まとめにした航空隊の司令官、関口史郎大佐ともう一人はトム島に基地をおく第7艦隊司令官木下四郎中将であった。

「はっ！ 関口大佐ではありませんか！」

「やあ、ちよつと309飛行隊の皆に話があつてな、これは陸軍も海軍も巻き込んだ騒動だよ」

濱口には理解できなかった、関口大佐がいうにこれは島全体を巻き込んだ事態らしい。

その後、小走りで野々村大尉が現れる。

「…うむ、わかりました」

「全員集合！！！！」

全員が呼ばれそして309飛行隊全員が集まった。

この事態を一番最初に発見した者に最初に話を聞いた木下中將が語りだした。

「私の部下が一番最初に気がついたんだがどうもここはトラック諸島ではないらしい」

「…」

一同は黙って話を聞く…

「なんでも我々の軍港から近くに大陸が見えるんだ」

皆半信半疑であつたが関口大佐の案で木下中將はそんな兵士達に信じてもらう為

実際に軍港へ連れて行つた

「なっ…なんなんだこれは？」

「あれは確かに大陸だ！ここはトラック諸島じゃない！」

「どつどこなんだよここは！」

皆驚きを隠せない。

無論濱口でもある。

「どうなっているんだ？終戦と同時にこんなになつてしまふなんて？」

「お前ら！ もうそろそろ黙れ！」

関口大佐がちよつと力を入れて注意する。
木下中將が続きを話す。

「実はまったく予兆がなかったわけではない、
先日の夜寝ようとしたら突然閃光が島を覆ったんだ、
私はその後すぐ寝たし第一夜の海はよくみえないからその後どう
なったかは知らないが」

「おそろこれがその結果であろうと思うんだ」

「もう陸軍にも説明したある、我々はもしかすると神隠しにでもあ
ったのであろう」

もちろんこんな事誰も信じられない、だが目の前の光景をみると信
じざるをえなかった。

その後陸軍の將校がこちらにやってきた。

トム島守備隊總司令官兼第356師団師団長石原宗一郎中將

「こりゃあどういふことですか海軍さん？ここはどこなんですか？」

「さあね、私にはわかりやしないですよ」

陸軍と海軍はとても仲が悪い事で有名だったがここでは概ね陸海軍
の仲はよかった。

特に互いのトップはとも仲がよかった、実はこの木下と石原は少
年時代からの友人である。

「…ならば陸軍さんがあの大陸に上陸すればよいのでは？」

見た感じ軍艦などは見られないですし米英が相手でなければ我々日本軍は最強ですよ」

「うむ、いいだろう、上陸まで護衛を頼む」

「ただし上は自衛目的でしか戦うなと言っていた」

「それは心配ないでしょう、この世界に国もくそもないと思うからね」

こうして陸軍を主体に大陸への上陸が図られた。

その陸軍を護衛に名乗りをだしたのは関口大佐だった。

「いいですよ、航続距離の長い零戦部隊を送りましょう」

さらに野々村大尉が名乗り出た

「その任務我々に任せてください、我々の隊が一番零戦を持っていますし」

パイロットもよく鍛えこまれています」

こうして日本軍には珍しい陸海軍共同の上陸作戦が行われた。

陸軍は歩兵を主力とした第109師団第一歩、第二兵連隊、戦車を主力とする第3戦車連隊を。

海軍は零戦を主力とした戦闘機隊を送り出し大規模な上陸作戦が行われた。

「よし、皆出撃だ！」

野々村は勢のいい声をだし部下に呼びかける。

零戦は栄エンジンの独特な音を出し次々と飛びたっていく。

一方の陸軍は揚陸艦を島の近くまで航海させる。

時は14時38分、大陸に上陸した。

「砲撃がないな」

「ああ、だが気をつけろよ…」

陸軍の予想では大規模な反撃にあうだろうとしていた、しかしなにもこなかった。

一方の零戦隊も粗悪な無線で交信していた。

「濱口少尉、おかしいですね、戦闘機の迎撃がこないですね」

「ああ、それに地上を見る限りこの大陸にある国の軍隊も見られない」

「俺たちは余裕で領空を侵犯しているというのに」

「ちょっと守りが手薄ですね」

「ここまで手薄だと逆に不安だな」

そうこうしてるうちに陸軍を見失ってしまったのだった。

「やばいな、陸軍を見失ったぞ」

「野々村大尉、その辺は心配ないかと思えます、翌日の朝陸軍は撤退する予定です」

「そうか、我々は燃料の事もあるから早めに退却しなければな」

数分後、気がついたら戦闘309飛行隊はどこか村の上空を飛んでいた。

「野々村大尉、集落があります!」

「ん? たしかに! ってことはやはり人はいるのだ!」

「ってことは今頃陸軍はこの軍隊と戦っているのでは?」

「いや、その可能性は低いだろう」

「隊長! こちらミタ機、2時の方向に戦闘見られる!」

「なんだと!?!」

なんと村の近くでどこかの軍隊が戦っていた、それも近代的な戦闘ではなかった。

「隊長! 同じ方角に一機飛行機が飛んでいます!」

「敵か!?!」

「いえっ! 塗装から零式戦です!」

「戦っているのか!?!」

「はい!あの動きは空中戦を行っている模様です!」

「ようし、爆弾を投下し機体を軽くしあそこで戦っている友軍を助けるのだ！」

戦闘309飛行隊は村の近くの空中で戦っている零戦を助けに行った。

しかしここからが長い戦いの始まりであった…

1話・ドコなんだよ…ココは（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

2話：タルブ村航空戦

その頃…零戦の搭乗員、平賀才人は

「クソッ！ 速いな！」

ブウウウウン

風竜の後ろにつき機銃を放とうとした時であった。

「弾切れ？」

才人の零戦は弾切れだった

風竜は後ろにつく！ 零戦が撃墜される危機であった。

「くっ…くそ！」

だがそのとき…

ブウウウウウウウウウウン

地上 -

「なんだあの大群は！？」

「おいあれは！？」

その存在は空中の才人、地上のルイズ達にも確認できた。
一番驚いたのは影で見ていたシエスタだった。

「あれは？ 竜の羽衣？」

「なんであんな沢山？」

彼女の曾祖父は日本海軍の少尉である、そうになると時間があわなくなりおかしい話でもあるが。

ルイズや才人も驚いた。

空中 -

「嘘…だろ？」

ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド

「なぜあれが沢山！？」

地上 -

「なんで竜の羽衣が…」

アルビオン軍はさらに火竜を送り込んだ。

数は40、零戦の数は23、数だけなら倍ほどの戦力である。

「よし、我が隊は前方の雲に入って逆落としをかける。

後方10機は爆弾をあの前飛行物に投下する、行くぞ！」

ヒュウウン

機体を軽くするため爆弾を投下、その爆弾が偶然アルビオン軍の陸上部隊に命中した。

零戦隊は雲に入り込みその後雲から姿を表す。

降下！野々村機が7・7mm機銃を放つ！

火竜を一匹撃墜した。
続く濱口も。

（食らえ！）

ダダダ…

ブウウン

零戦隊の奇襲は成功、一気に12匹を撃墜

その後も空中戦が行われる

ダダダ… ダダ… ダダダダダ…

ブオオオオオ ダダダダダダ…

竜ごときが20世紀の兵器にかなう筈もなく次々と撃墜されていく。
野々村が最後の1匹を撃墜した同時に濱口は才人と戦う風竜を撃墜
しようとして
背後へつく。

「こいつは速力に優れているらしい、ならば左旋回で格闘戦にもつ
れ込もう」

ブオオオオオオ

「なんだと！ くそお！」

「こいつはすこしばかり手ごわいらしい、なかなかすぐれた運動性
能だ、

竜にしては感心だ」

そういつと濱口は7・7mm機銃を放つ、

ダダダ…

「ぐあああああ！……！」

ブオオオンウン！！

その頃アルビオン軍の戦艦は零戦隊のすさまじい攻撃を受けていた。木造であるためたちまち炎上し落ちていく…

野々村が帰還命令を指示する

「よし、全機帰還する！」

戦闘309飛行隊の活躍でタルブ村上空の制空権はトリステイン王国に戻る、

陸戦はルイズ達の活躍もあり勝利する。

一方の才人は日食の中に飛び込めず結局この世界にとどまるしかない。なる。

才人の零戦にはルイズが飛び移る。

「バカッ！バカッ！バカッ！ どうするの！？」

「しかたないだろ」

チュ

「えっ？」

「これは再契約の証だからね」

「はあ！？」

「ご主人様の命令よ、あの沢山の竜の羽衣をおつて！」

「でも燃料が足りるかな？」

「早くいくの！」

「…へいへい…」

数十分後、戦闘309飛行隊は基地へ帰還、全機が健在であった。そのご数分遅れで才人の零戦が基地上空を飛行する。

「すげえ、零戦が沢山だ…」

「なんでこんなに竜の羽衣が、形が違うのまである！」

形が違うもの…夜間戦闘機「月光」や九七艦攻、九九艦爆だろう。

「と…とりあえずこつちも零戦だし怪しまれない…よな？」

「私に聞くな！」

「うつ…とりあえず降りるぞ」

平賀機は着陸を試みる、既に海軍の整備員が待機しており滑走路も空けてあった。

「なかなか降りてこないな」

「濱口少尉、そこには危険ですので」

「ああ、わかった」

その後平賀機は着陸に成功、だが。

「なんだ貴様ら!？」

見た事もないような格好をしている男、そしてどうみても日本人じゃない女。

野々村大尉は少々警戒気味だった。

「おつ…おちついてください！ 俺は日本人です!」

「なんだって!？」

「野々村大尉、少なくとも零戦に乗っているということはそうではありませんか？」

「…そうだな」

2話：タルブ村航空戦（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

3 話：ハルケニアという世界

「さあ、話を聞かせてもらおう、」

「はい、俺は平賀才人、日本からここに飛ばされてきました」

「お前もやはり日本人か!？」

「ええ、そうですが」

「なるほど…しかし我々とは姿が違う、内地でこのような服装をすれば大変なことになるが」

「俺は貴方たちから見れば今から60年以上も後の時代の日本人なんです」

「ちなみにこいつはルイズ、見ての通りこの世界の人だ」

「悪かったね…この世界の人で!」

「べつ別にそんなこと言ってないだろ？」

同じ世界、と言っても日本軍にとって60年以上も後の時代から来たと言う平賀才人。

この世界で育ったというルイズ。

「そんな馬鹿な話があるのか？」

「ええ、ありますよ、現に俺も貴方たちもこの世界にいるじゃないですか」

「それで、ここはどこなんだ？」

「ハルケギニアという世界です」

「ハルケギニアだって？」

「聞いた事ないぞそんな地名」

「やはり俺たちは神隠しにでもあつたらしい」

「濱口少尉、いったいこれは？」

「俺が知るわけないだろ？」

一同はなんだかよくわからなかった。

そんな非現実的な事って起こることなのだろうか。

「なるほど、よくはわからんが、俺たちは国に帰れないかもしれないかもしれないと言うことだな？」

「つてかほぼ確実に帰れませんけど…」

（そうか…とうとう出征してから家族に顔を合わせることとはなかったな）

（嘘だろ…？ 国に帰れないだ！？）

俺は今までの為に戦ってきたんだ！？）

野々村にとつても濱口にとつても、そしてほかの日本兵にとつても
国に帰れないことは
かなりのシヨックであつた。

司令官、関口大佐は彼らに戦争が終わつたら生きて帰れと教えたか
らだ。

そしてその大東亜戦争は終わりこれから帰れる…というところにこ
れである。

「…ところで平賀つて奴、あの零戦は？」

濱口が才人に訊く

「あ、あれはこの世界にあつたんです、格納庫にしまつてあつたの
を飛ばして…」

「そうか…まちがいないな、あのほかの零戦と違って文字が塗られ
てるあの塗装は

1年前病氣になつて内地に送られた同期の佐々木武雄が乗つてい
た機体だ」

「そ、そういえば格納庫の前にそんな名前の人が…そうだ！シエス
タの曾祖父です！」

「曾祖父？ なにかが変だ、あいつがそんな歳なわけがないし
第一あいつは今内地にいるはずだ」

「それにもしここにきてから爺になるまで暮らしてたとしたら俺た
ちと

時間があわない」

タッタッタ…

「誰だ!!」

足音に気がついた五十嵐飛曹長が怒鳴り上げる、
つとあるいてきたのは禿げたオッサンだった。
才人はその人の名前を言う。

「こつ コルベール先生!？」

「なんでここがわかったんですか!？」

「いやあ竜の羽衣をおっかけてきたら偶然ここについてっでさっき
の話を

聞いていたんだよ」

「竜の羽衣をお操りになられてる皆様、おそらくその佐々木という
男は別次元から

きたのでは、と私は予想します」

「だがそんな馬鹿げた話は…」

「ありえますぞ、貴方たちは才人君の世界の人間だろうから当然魔法
なんて

ものはないと思いますから信じられないだけでしょう、

この世界の何者かが、あるいはなんかの縁があつたのでしょう」

「難しくてわからんぞ、とりあえず時間が狂つたことにしておくか
…」

たまたま出会った日本人、平賀才人の話により少しはこの世界について
わかつたのであつた。

一方ハルケギニア大陸に上陸した陸軍は…

「な…なんじゃこりゃあ…」

彼らが見たものは兵士の死体だ、それも死後数ヶ月がたっており蛆がわいていて腐臭がひどかった。

「ガ…ガダルカナルの再現だ…」

「ちよつと違うだろ…」

第一歩兵連隊隊長関弘道大佐

「皆、気をつけろ、どうやらこの大陸にも軍隊はあるらしい」

「隊長、そろそろ引き返したほうが、戦車の燃料がなくなります」

「そうだな、だがあと10キロほどは問題ないし明日の朝までに帰還すれば問題はない筈だ」

「隊長！ 1時の方向から謎の集団がこっちにきます！」

「なんだって!？」

「後方の第二歩兵連隊と第三戦車連隊に連絡しろ！ もしすると戦闘になるかも知れん！」

「はい！」

その後その集団はどんどこちらに近づいてくる、

やってきたのはタルブ村から撤退してきたアルビオン軍の生き残り
138名ほどだ。

装備は剣、弓と3つの大砲だ。

アルビオン軍と日本陸軍はたちまち遭遇、

アルビオン地上戦隊の隊長と思われる人物と第一歩兵連隊長関大佐
は互いをにらみ合った。

3 話：ハルケニアという世界（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

4話・日本陸軍上陸部隊vsアルビオン地上戦隊！

ひゅー

強いとも弱いとも言えない風が吹く。

両軍が互いを睨み合う、まるで戦争前だ。

アルビオン側が先にしゃべりだした。

「貴様らはどこの軍隊だ？ 言え」

「大日本帝國陸軍だ」

「大日本帝國陸軍だと？ 聞いた事もない軍隊だ、まさかトリステインの同盟国の軍隊か？」

「そもそも我々はトリステインがなんだか分からない、貴様らこそ何者だ？」

「私はアルビオン軍第七地上戦隊隊長レキコフだ」

「我々は先ほど貴様らと似たような軍隊の竜にほとんどやられた。我々は残ったわずかな兵だ」

「似たような軍隊の竜？ ハハッ どうやら海軍の奴ら派手にやっ
たらしいな」

「海軍？　ということはやはり貴様ら奴らの仲間だな！」

アルビオン軍の兵士達は即座に戦闘体勢に入った。

「我々は多くの兵士を失った、だが兵士達の士気はかわらないし
おまけにお前たちの竜はすぐとも地上の戦力はすぐみえない」
「なんだその汚くて弱そうな軍服は？　それにその銃みたいなものは？」

「でかいだけで使えないんじゃないか？」

「後ろの大砲も砲が小さすぎなのではないか？」

「それは俺たちに対しての挑戦状か？」

「そうだ、先ほどのかりをかえさせてもらっ、我々は少数だが精鋭である！」

我が軍は無敵だ！」

すると何人かの兵士が矢を放ち五本が日本兵に命中した！

「ぐあっ！」

「あああゝあゝ！！！」

「大日本帝國萬歳！！！」

「おかあちゃあん！！！！！」

「うあああああああゝあゝ！！！！！」

「おい！　しっかりしろ！！！！！」

「おのれ！！！」

「よし！　一気に五人を倒した、さらに進撃せよ！！！」

アルビオン軍は大砲を放った、弾は後ろの九七式中戦車に命中した。

カアアアン!!

「なんだと!? 弾を弾いた!」

「目標! 敵の砲兵!」

「踏み潰せ!」

ガアアアア

戦車が動き出す、

ガシヤアア!!!!!!

一門が破壊される、

「くそっ! 撃て! 集中砲火だ!」

だが残りの大砲も戦車に踏み潰されてしまう。

「よし! 今度は歩兵の攻撃だ! 突撃い!」

突撃ラツパが鳴り響く

「うおおおおお!!!!!!!!」

ダダダダ…

バババハン…

タタ…タタタタタタ…

タン！タン！　ダダダダダ…

「魔法だ！　攻撃魔法で敵を攻撃する！　まずは大砲で壊せないあの動く大砲だ！」

レキコフ率いる数人は攻撃魔法のほかいろいろな魔法が使えた。しかしどの魔法も通じなかった。

日本軍の戦車はほかの国のとくらべると貧弱なものであった。しかし魔法に耐えるには十分な強度であった。

「くそっ！　これでも食らえ！」

レキコフはゴーレムを召喚した歩兵にとっては脅威である。

「なんだあれは！！」

「バケモノだ！！！」

「恐れることはない！　戦車なら倒せるはずだ！」

「撃て！　敵に穴をあける！　徹甲弾を放て！」

ドゥーン！！！！！！

日本軍の戦車はほかの国のと比べて攻撃力が低かった、それでもゴーレムを倒す程度ならならんら問題はなかった。

レキコフは続いて7対を召喚、しかし軽戦車、中戦車のどれも互角に戦えなかった。

「…うつ…」

「撤退だ！」

ダッダッダッダッ！！！！

アルビオン軍の残った兵士達は次々と撤退していく。

「連隊長！ どうしますか？」

「深追いする必要はないだろう、それこそ我々は迷って撤退ができなくなる」

戦いは終わった…

アルビオン軍側の戦死者は138名中131名、ほぼ全滅状態だ。また所持兵器のほとんどを失った。

一方日本側の戦死者は僅か12名、負傷者20名、その負傷者も一週間すれば

まだ戦える程度の軽傷であった。

勝敗は明らかであった、日本陸軍の圧勝である。

しかし日本軍はここでまた無駄な戦力をつかってしまった。

「連隊長、ほんとにいいのですか？ 奴らを逃がしたら奴らの国にこのことを知られて

しまいそのうち我々に戦争をしかけてくるかもしれません」

「いや、その時はその時だ、あの程度ならたいして脅威にならないし無駄な戦力をつかいたくない、貴重な武器、弾薬が枯渇してしま
う」

「そうですか…」

翌日、陸軍は大陸から撤退、ほとんどが生きて島に足を踏めたのであった。

またこの時海軍の基地には一機の零戦が降りてきた。
才人とルイズである。

「ほう君たちか」

「あんた達、誰でもいいからちよつと来てよ
女王様が呼んでるから」

「ちよつ！ ルイズ、もっと頼み方がほかにあるだろ！」

「うるさい！ あんたは黙ってて！」

つまりはルイズの国の女王が日本軍に用があるらしい。

トリスティンの女王はアンリエッタという人らしくこの前の戦いに参加し兵を率いて

立ち向かいその名声を背景に女王に即位したらしい。
つといても彼女は地上にいたため海軍のパイロット達が気がつく
はずもない。

「なるほど、誰かこの才人君とルイズちゃんについていつてトリス
ティンの女王様と

面会にいつてくれるものはいないか？」

つと野々村大尉は言うが

（自分で行けばいいのに…）
とほとんどの日本兵は思っていた。

「ルイズちゃんかわいいしほかのかわいいこいるかな…俺いつて
みようかな！」

五十嵐飛曹長が名乗り出たが濱口はこれを止めた

「お前の場合手を出しそうで怖いから俺がかわりに行つてやる」

「濱口少尉ひどいですよ！」

「ロリコンはだまつてる危なっかしくてつれてけないだろ」

「フツ　才人みたいな人だねあの五十嵐とかいう平民」

「俺はロリコンじゃない！！」

結局濱口少尉が行く事になる、
そつ決まると彼は早速愛機に乗り込む。

(…なんていったけど…俺みたいな士官の下っ端が国家元首と面会するのは

ちよつと緊張するぜ…)

「よし！ 回せ！」

濱口の掛け声で整備員達は始動用スターターを回す。
スターターが充分回った事を確認しエンジンを掛ける。

「コンタックー！」

コンタックとは接続を表すコンタクトがなまったものであり
日本海軍独特のものである。

栄二一型エンジンの調子はとてもよい、この期待はちゃんとした整備兵が整備

したもので戦争末期の学生が造り上げた期待ではないためスペック
どおりの性能が出ている。

栄エンジンの独特な音が滑走路に鳴り響く、一方平賀機もエンジンを掛け終えていて

いつでも離陸ができる状態となった。

平賀機が横にならぶ、横にならんだ時濱口は質問をした。

「ところでロクな兵器もないその国に滑走路はあるのか？」

「ええ、学園の方々が簡素なものだけど滑走路を造ってくれましたので」

「そうなんだよ、竜の羽衣ってホント不便だよね」

「竜の羽衣？」

「この世界での零戦の名前です」

「そうか、まあいいや、そろそろいかなければならないのでは？」

「そうですね、案内しますので後ろについてきてください」

栄エンジンの音が鳴り響く、二機の零戦は華麗に離陸していき大空へ舞う…

4話・日本陸軍上陸部隊vsアルビオン地上戦隊！（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

5話：第二次タルブ村航空戦

ブオオオオオオオオ...

二機の零戦は快調に飛ぶ、特に才人の零戦は固定化の魔法がかけられている為

濱口の零戦よりも状態がよくより良好な性能を出していた。
だが同じ機体であるゆえその差はあまりない。

「ねえ、才人」

「なんだ？」

「前々から気になってたけどなんで竜の羽衣が沢山あるのよ？
あれってひとつじゃないの？」

「あれはな、俺たちの世界での戦争に使うための兵器だ沢山つくられたんだよ」

「ふーん、ってことは帰れるんじゃないの？」

「そうだろうけどもうそんな気はなくなっちまった」

「ふーん、あんたなんていなくても大丈夫なのに」

なんていつているがルイズは才人がいないと生活できなさそうである。

「そうだ、後で濱口さんたちの飛行機も固定化の魔法をかけてあげないとな」

「あんた魔法つかえたっけ？」

「俺は使えないけどな、その時は頼んだ」

「はあ？ 私がやるわけないでしょ！」

一方濱口機は…

「暇だ…」

暇だったらしい。

「まあ何時間も黙って操縦したことなんて何回もあるけどな…」

それでも、暇なものは暇、なのが人間である。

そうこうしてるうちに村が見えてきた

数日前空中戦を行った「タルブ村」だ

「長閑な風景だ、故郷を思い出す」

タルブ村の長閑さを見て濱口は故郷を思い出したらしい。

「…兎追ひし…かの山…小鮒釣りし…」

「うっ…」

涙でそれ以上歌えなかった…二度と帰れない故郷、二度と会えない家族。

そして二度と戻れない国を思い出すと涙がでてくるのであった…

ドガアアアン

「ん？」

気がつく…タルブ村のどこかの家が炎上しており上空には多数の竜がいた、

アルビオン軍がまた攻めてきたのだ。

どうしても補給上重要なタルブ村を占領したいらしい、制空権を手に入れるため

航空兵力のみで襲撃してきたのだった。

濱口は粗悪な無線で平賀機にこう言った…

「右前方2時の方向にアルビオン軍と思われる竜、数は23」

しかし才人の零戦はルイズを乗せるため足りない装備はすべてとっぱらっていた。

そのため無線で連絡を行うのは不可能であった。

仕方なく急加速、横に並び手で合図する。

そしてようやく才人は気がついたのだった。

「あつ！ まずい！」

「才人！」

「やるしかなさそうだ！ 弾はあそこの基地で補給したからいっぱ

いる、

ルイズ！しっかりつかまってる！」

濱口はさらに手で合図する

俺についてこい　という合図だ

濱口機から降下、旋回し敵に近づく、それに続く形で才人も近づく。

地上・

「うわぁ！！！」

「助けてくれ！！！」

「くそっ！　軍はまだか！？」

民衆が騒ぐ、その中にいたシエスタも緊張している

（才人さん…）

何気に才人の事を気に入ってるシエスタは彼が「竜の羽衣」に乗って敵を

撃退してくれると信じていた。

すると、

ブオオオオオオ…

一度か聞いた音がこちらにむかってくる。

「あれ、竜の羽衣」

シエスタは笑った、きっと才人に違いなと思った。
それは正解である、一機は才人の機体である。
わか of 住民も零戦に気がつく。

「おお！ 竜の羽衣だ！」

「しかも二匹いる！」

「いいぞ！ いけえ！」

「今日は雲がないな…よし、敵の下を通過し敵の後ろに回り込み奇襲をかけよう」

ブウウン

濱口が降下を始めそれに才人も続く、
右旋回で後ろにつき7・7ミリ機銃を放つ。

ダダダ…

続く才人も7・7ミリを放つ。

ダダダ…

ダダダ…ダダ…ダダダ…

ブオオオウン！

ダダ…ダダダダ…

彼らの勇猛果敢なる攻撃は華々しい戦果をあげる。
次々と竜を撃墜していく。

ブウウウウウン！

竜は撤退していき残ったのは2匹となった。
濱口得意の「一撃離脱」

ダダダ：

濱口は離脱していった、一方格闘戦を行っていた才人も最後の1匹を撃墜した。

「ありがとー！！」

「トリステインもすてたものじゃないな！！」

「竜の羽衣は最強だ！！」

「ふう…無駄な燃料と弾をつかってしまった」

空中戦をすると通常より早く燃料を消費する。

しかし今やトリステインでもガソリンを複製できるため補給上の面ではなんら

問題はなかった。

この先は当初の予定通り王都「トリスタニア」を目指すので道を知っている

才人を前にいかせる。

しばらく飛ぶと「トリスタニア」が見えてきた。

「綺麗な町だ、京都とはまた違った美しさだ」

二機は城内に建設された滑走路へ着陸する。

5 話：第二次タルブ村航空戦（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

6 話・女王との話

「すげえ…」

思わず口にしたほどであった、濱口にとってこのような城に近づいたのは始めてである。

「さあ 入って」

ルイズがちよつと冷たげに言う

「すみませんね、あいつは魔法が使えない人にはつめたいんです」

「はっはあ……」

そもそも濱口は魔法というものが理解できなかった。それはあたりまえである。

城に入るとそれはそれはとても広い、自宅の比にならないほどの規模だ、

「こちらです」

案内人が濱口を案内したどり着いた場所は個室だ。

ふわふわのカーペットに真ん中に立派なテーブルがありすわり心地のよささそうな

椅子があり二人が座るとちょうど向かい合うような形であった。

どうやら大事な話らしくルイズと才人は去っていく…
部屋には濱口だけが残された。

「…」

言葉も出なかった

「これを日本が見たら怒るだろうな…贅沢の塊だ」

ガチャ

ドアをあけたのはルイズだ、戻ってきたのか？

「あんた、女王様と会うのにそんな汚い格好でいいと思ってるの？」

わかりきっていた、少々きついことを言われることぐらい
だが濱口も日本男児、流石にムツときた

「これは海軍の飛行服だ！ 馬鹿にすると痛い目見るぞ！」

「うつ…うつるさい！」

ベシッ！！ ムチの痛烈な一撃が濱口に

「いついてえ…」

「今度言つと締め付けるからね馬鹿犬」

ボタン！！

（なっ…なんだあいつ、荒鷲の心である飛行服が汚いだと？
しかも犬呼ばわりだぞ？ ひどいやひどいや）
（あいつといつも一緒にいる日本人の気が知れん）

ガチャ、 今度は正面のドアが開いた、すごく美人だ。

「二人から話はききました、貴方が濱口健介海軍少尉ですね」

「ええっ そうですけど」

「お二人からお話は聞いたと思います、私がこの国の女王、アンリエッタ・ド・トリステイン

という者でございます」

「よろしく願います」

「えっ？ ああこちらこそよろしくお願いします」

「まずはですね、貴方達日本軍の方々に感謝をしなければなりません、

以前の戦いでタルブ村を守りきれたのも貴方達のおかげです。
本当にありがとうございます」

「いえいえ、たまたまここはどだと偵察飛行を行っている所
なにかどこかの軍が戦ってるように見えてそこに我々が使用して
いる戦闘機が

一機で戦っているのを見てそれが理由で戦闘に参加しただけで」

「ですが私の国を守ってくれたのにはかわりありません」

「あっ…ありがとうございます」

「さて、お礼を終えた所で本題に入りたいと思います」

「実はです、貴方達が竜の羽衣であっさり倒した軍隊は神聖アルビオン共和国と

言う国のものです」

「元々あの国とは良好な関係でしたがアルビオン王族がレコン・キスタに滅ぼされ

そして今やこの国と戦闘状態なのです」

「それと、俺たち、なんの関係があるんですか？」

「私たちと一緒に戦ってほしいのです」

「いつ 一緒にですか!？」

「ええっ 竜の羽衣はものすごい高空を飛行できてかつ攻撃力が高くなり高い

って伝説ではそういわれてます」

「その伝説を信じて竜の羽衣で私たちの艦隊と一緒に戦ってほしいのです」

「俺はいいのですがこれは俺独断で決めれる事ではありません、

トム島守備隊総司令官は俺ではないので…」

「だいいちアルビオンがどの程度上空にあるのかわからない、零式戦が飛んでいける高度なんですか？」

「ええ 多分です、地上3000メートルほどです」

メールとは小説を書いている私もわからないのであるが

恐らくメートルとかわりないと思う、だが濱口がそんなことを知るは

ずもない

「メール？ わからん、メートルか？フィートか？」

「多分それくらいなら簡単にいけると思いますが…石原隊長が許可してくれますかそれはわかりません」

「そうですか、別に無理とはいいませんが私は多くの犠牲者を出したくないのです」

「なので是非ものすごい装備を備えている日本軍の皆さんと一緒に戦いたいのです」

「…」

「…わかりました、この事は直接私がお話しておきますので、もうしばらくお待ちください」

「ええつよい回答をお待ちしております」

そして .

.
.

トム島守備隊総司令部 .

「…こりはつまり同盟し共に戦えということだな」

「はっはい！」

「…」

濱口はどうしても陸軍の人と話す時は緊張する。

この島の陸海軍は概ね仲がよいのだがそれでも日本軍自体陸軍と海軍の仲は悪い。

なんせ同じエンジンでも陸軍と海軍では呼び名が違う。

そして陸軍は個別に空母などの普通海軍しかもっていないような艦船をもっている。

それほど仲の悪い軍同士なのだ、たとえここの指揮官同士の仲がよくても

陸軍の施設に入るだけで殺されるのではないかとすら思ってしまうのである。

「……」

石原も黙り込む、重大な^ゞ決断^ゞの時である。

「これを拒否した場合…どうなると思う？」

「はっ！ 私にはサッパリで……」

「女王はいい人だったか？」

「はっ！ とてもやさしそうな人でしたが……」

「そうか…もしかすると拒否した場合戦争になるかもしれん」

「そのトリステインという国と」

「えっ！？」

「パツと見優しい人とはどこか必ず裏がある、
もちろん全員がそうであるとは思っていないが相手が国家元首となるとな」

「万が一全面戦争になっても勝てる自身はある」

「ただし我が軍は最大の問題を抱えている」

「武器、弾薬の補給が不可能なんだ…」

「…」

「わかるだろ、このあたりに生産工場などまったくないし

第一あったとしても我が軍の為に製造してくれる工場などあるわけがない」

「私としては…戦いたくない、いつかはあるであろうこの世界のどこかの国との

全面戦争の為に戦力を温存しておきたい」

「全面戦争ですって!？」

「ああ、私は予想するよ、近いうち必ず我が軍とどこかの国で全面戦争になる」

「一国でかつトリステインのような小国ならなんとかなる」

「だが大きな国と戦争なんてやってみろ、弾が足りない」

「それと同盟を結ばれてもやばい、弾がたりなくなる」

「もし同盟軍と、あるいは大帝国との戦いになった場合一ヶ月は何事もなく

暴れられるだろうが武器、弾薬が尽きて玉砕するのがオチだと私は思っんだ」

「…」

「生産工場があるなら話は別だが…食糧も自活できるし油田もある…」

「くそっ！ 弾さえあれば何年でも暴れられるというのに!」

その時、濱口はある事に気がついた

「そういえば、あの平賀才人って男、日本人ですよ」

「ん？ ああたしかにそうだ」

「彼がいて我々がいて…みんな我々の世界からきた人ですよ？」

「そうだ、だからどうしたんだね？」

「ってことは我々のほかにも世界にきてしまった人はいるのでは？
もしかしてその人は今の武器や弾薬、運がよければ戦車や戦闘機、
戦艦とかまで

手にはいるかもしれません！」

「たしかに、ありそうな話ではあるがそれを見つけるにはかなり手間がかかる上

結局は兵器だ、物が尽きて終わるだろう」

「もしかして兵器を生産している工場もあるかもしれません」

「この世界にやってきてから、造られた工場が」

「…」

「…あるとは思えないが…いいだろう、ちょっと探してきてくれ」
「それに兵員をあつめるという点ではいいかも知れん、現に陸軍では数名ほど

死者がでている、歩兵の補充が必要なんだ」

「わかりました、必ずやひとつは探し出してみます」

「それについて私も協力させてもらいたい、海軍ばかり活躍させてそろそろ疲労も見え始める頃だ」

「いえ、俺は大丈夫です、」

「そうか、だが陸軍もなにかしなければならぬ」

「兵器探しは大変だ、一人でやるのも大変だ」

「そこで今回は陸軍の航空機で行ってもらおう」

「えっ？ 陸軍のですか!？」

「ああ、軽爆撃機だがそれでも結構人は乗れる、航続距離も長いし丁度いいだろう」

こうしてほかの場所ではありえない陸軍の好意で航空機と操縦士まで貸してもらった、海軍からは濱口と巻き込んでやったぜ五十嵐を、陸軍は操縦士赤松、を、また護衛として隼戦闘機2機を貸してくれた。

戦力増強のため、陸海軍共同の兵器集め作戦が行われようとしていた。

6話・女王との話（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

小説の書き方を参考にしていた「ゼロ戦才人」に影響されたのか兵器集めになっちゃいましたかどうかお許しお願いします、すぐに終わりますので。

あと、出してほしい兵器がありましたらリクエストしてください、もしかしたら登場するかもしれません。

7 話：場違いな工芸品【前編】

ブオオオオオオオ...

1機九九双軽、2機の隼戦闘機が飛行する。

九九式双発軽爆撃機とは1939年、試作機が初飛行し1940年正式採用された双発の軽爆撃機。

戦闘機並の速度と運動性能を誇り対ソ戦闘を意識して造られたものの大東亜戦争中南方戦線にも派遣され戦争中全期間を通して使用された名機である。

一方の隼はキ-43として試作されるも九七式戦闘機に劣る性能だった為採用はされなかった。

しかし開戦が避けられない状況となり遠隔地まで爆撃機を援護することが出来る

航続距離の長い戦闘機の需要が生じた、キ-44の配備も間に合わないことと飛行実験部実験隊長の今川一策大佐の推薦もあり急遽このキ-43を改良した期待が正式採用された。

皇紀2601年（西暦1941年）に採用されたとにより「一式戦闘機」と名づけられる。

「隼」とはこの一式戦闘機の愛称である。

隼は実質終戦まで陸軍の主力であった、操縦しにくいという評価をうけた重戦タイプの

「鍾馗」やエンジンに問題のある飛燕、エンジンの不調により本来の性能を出せない疾風。

そして登場が遅すぎた良戦闘機「五式戦闘機」…隼は陸軍が最も信頼できて

かつそれなりの性能を誇る戦闘機であった、連合軍も零戦より隼を恐れたという、

当時の日本の戦闘機としては零戦と並ぶ名機であろう。

今回隼は九九双軽の護衛のため共に飛行している。

九九双軽操縦士赤松曹長

「海軍さん、本当に俺たち以外に兵器を持ち込んだ奴らなんているんですかい？」

「ええ、現に俺たち以外にも日本人はいます」

「でもよ？ 流石に軍需工場まではないだろ？」

「多分ないでしょう、ですが銃弾ぐらいは兵器と一緒に見つかるかもしれません」

「俺たちの兵器と規格があわなかったらどうすんるんですかい？」

「その時はその時です」

「でもなあ…弾をみつけるのは苦労物ですぜ？ それにそう簡単に地球の兵器が

転がってるとはかぎらないし、あつたとしても日本刀だったら使い物になりませんか？」

だが、赤松の不安はすぐに吹っ切れることになる、五十嵐飛曹長がなにかを発見した。

「赤松曹長！ 濱口少尉！ 航空機三機と5人が地上にいます！」

「本当か!？」

「はい、しかも相手はこちらに手を振っており滑走路をあけています」

「よし！ 着陸を試みよう」

赤松は護衛戦闘機2機に着陸準備の合図を送る。

足を出しフラップを、着陸、ブレーキ、 数一〇〇メートルを走行した後

三機は止まる。

機内から降りると確かに航空機が三機あった。

「…戦闘機が一機、輸送機が二機か…」

「赤松さん！ こちらに五人がやってきます！」

「!？ ドコの国の奴でしょうね」

歩いてきたのはLuftwaffeルフトヴァッフエの服を来た外国人だ。

「ふう、よかった、君たちは日本空軍の人たちですね」

ドイツ語訛りの日本語をしゃべりまた日本に空軍がないことも知らない様子だ

「我々はドイツ空軍のものです、見ての通りドイツ人です」

「そうか、俺たちは日本陸海軍航空隊の者です」

濱口はちょっと目をそらし彼らの航空機を見てみると確かにドイツ軍の航空機だった。

写真で見た事があるくらいだが彼はこの航空機達がなんなのを知っていた。

一機はメッサーシュミットのbf109だ。

「ん？ どうしました？」

「いや！、いい飛行機だなと思いました」

「ああ、109のGタイプは最高だ、P-51とも戦える」

これはbf109G-10というタイプらしい

そして残りの二機はユンカースのju-52 大戦を通して活躍したドイツの輸送機だ。

そんなことを考えてるとドイツ空軍の将校が話し始めた。

「我々はゲリラとしてソ連と戦闘を行っていた。

ところが日本時間でいう8月15日の夜中に光に飲み込まれ気がついたらここにいたんだ」

「我々と同じ時間にここに来たっていうのですか！」

「ええ、そうです」

終戦の夜… なにかが起った、それは日本だけではなく国際的なものだった…

…ということは味方のドイツならまだしも鬼畜米英や真っ赤なソビ

エトもこの世界のどこかに
いるかもしれないということだ。

さてここで交渉である、濱口が味方にさそいこむよう言う

「あの…もしよければ我々と一緒に戦っていただけませんか？」

「ん？」

「我々は今約一ヶ月〜二ヶ月の戦闘が可能ですがその弾もいずれは
尽きてしまいます、

そこでドイツ空軍の皆様と共に、油田もありますし機械に強いゲ
ルマン民族の力なら

工場の建設も可能かもしれませんし我々にとっても貴方方にとつ
てもプラスになる話だと

私は思うのですが…」

そう言うドイツ軍の人はにつこり笑いながら答えてくれた。

「ええ、いいですよ、5人で行動するより貴方達と行動したほうが
安全に思いますし我々も補給線が絶たれて困っていたのです」
「それにドイツと日本は盟友です、是非共に戦いましょう」

「ありがとうございます！」

盟友ということもありあっさり交渉は成立した。

また運がいいことに五人のうち3人は武器の製造ができた、工場さ
え作れば

生産が可能となる、石原の予想によると近いかもしれないハルケギ
ニアの国々との戦争、

それに備える為軍需工場と兵器生産能力は必要なのかもしれない。

また輸送機の中は大量の武器、弾薬が詰め込まれていた。

ここから日本軍の基地までは僅か30キロということもあり航続距離の短いドイツの航空機でも

充分行き来できる距離であった。

今回の兵器探しはこれで終了した。

だが翌日も兵器探しの仕事が続いている…

7話：場違いな工芸品【前編】（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております

8話：場違いな工芸品【後編】

翌日：ドイツ軍が仲間になってから1日

ガチャ

「おお、貴方がドイツ空軍のデイトリヒ・ケンペル少佐ですか」

「…とすると貴方がこのトム島守備隊総司令官石原宗一郎中将ですね」

「うむ、しかし驚きでした、まさか本当に我々以外にこの世界にきてしまった者がいたとは」

「私もてっきり我々5人だけかと…」

「また赤松曹長たちを搜索にいかせた、なるべく多くの戦力を蓄えトリステインと共闘することになった場合予備兵力を沢山蓄えておかねければ

ならないからな、戦力温存の為に…」

一方九九双軽と隼2機は…

ブオオオオオ…

「うーん、陸上兵器がほしいな」

「えっ？なんですか？」

「ああ、我が軍は機甲戦力が欠けるんですよ、どこかに戦車とかでも転がってないですかねえ」

最初は兵器が落ちているワケがないと思っていた赤松だがドイツ軍のこともあり今では完全にありと信じている。

30分後…

「綺麗な湖だな…」

濱口が口に出すほど美しい湖はラグドリアン湖、ガリアとの国境付近に存在する

湖だ、現在その上空を飛行している。

現在日本軍はガリア側を飛行中、無論許可をとっているわけではなく領空侵犯であるが

彼らはそんな事を知る術もない。

一方五十嵐はここでルイズとデートしたい…なんて考えていた。顔はニヤニヤしている…ロリコン丸出しであった。

だが彼は大発見をする。

「ん？ 濱口少尉！赤松曹長！ 湖畔に7台なにか車両があります！」

濱口は窓の外を見る

「ん？確かになにかある」

「着陸は可能か？」

「整備された所がちょっとだけ離れた場所にありますが、そこなら着陸は可能かと」

「よし、降りてみよう」

ブオオオオオオオ...

着陸後...

「では、しっかり見張っていてくれ」

「はい！」

隼の操縦士二名を見張りにし三人は早速謎の車両7台の所へ向かう。数分ほど歩いた所にそれはあった...だが迎え撃つ人間の手には銃や剣があった。

「貴様ら！！ 何者だ！？」

赤松は訊かれると答えた。

「大日本帝國陸軍、飛行兵の赤松だ、右の二人は海軍の飛行兵だ」

「日本軍だと？ 何故日本軍がここに！！」

赤松は後ろを確認すると戦車が7台あった。
赤松は飛行兵であるためあまり戦車には詳しくないのだが大体わかった。

アメリカ陸軍のM4中戦車「シャーマン」である。

M4中戦車は大戦中期頃からの米軍の主力であり性能こそあまりよくはないが
欧州戦線ではドイツのティーガーを相手に数で圧倒しティーガーを倒した。

太平洋戦線では日本軍の戦車を圧倒し最強の存在だった。

「なるほど、お前たちも15日にか…」

「…とすればお前たちもか…」

「戦いが終わって…生きて祖国の土を踏めると思ったらこんな所に飛ばされて

しまうなんて…つくづくついてないな、俺も、日本の皆さんも…」

「俺たちはフィリピンで戦っていたんだが15日の夜だ、気がついたらここにいたんだ」

「そうか、俺たちは戦線の後方に孤立しちまった島の守備隊と同じ日に

島ごとここにきてしまった」

「島ごと？　ってことは補給は可能か？」

「うむ、武器、弾薬の生産は今の所不可能だが燃料の補給は可能な食糧も自活できている」

「そうか、もはや日米の戦いは終わった、その島に我々を上陸させてくれ、

食糧と武器、弾薬が不足しているんだ、今後この地域での戦いもあるかもしれんし」

「軍が米軍の上陸を許すかはわからないが一応交渉してみよう」

「ありがとう！私はアメリカ陸軍大佐、ジョン・ゲンガーだ、
今後は日米友好の為、そして我々の自立の為共にがんばろう」

アメリカ軍戦車連隊隊長ジョン・ゲンガー大佐と数十人の軍人、M4中戦車7両を
入手した日本軍は直ちに島に戻り交渉を行う。

「うーん、戦争も終わった、そしてここは異世界だ、
皇国の米国もない、この世界の奴らは魔法という変な技も使う」
「敵味方は関係なしにこの島に入れるべきだろう」

日本軍の兵士達も些細なことで戦っている余裕はない事をわかっており

アメリカ軍の上陸を許可した。

3日後、ジョン大佐達が上陸、不思議な事に奇跡なのか日本軍との摩擦も特におきなかった。

日本軍の各部隊は島内戦闘を避けるため米兵に喧嘩をうつことを戒め始めた。

第3戦車連隊隊長辻吉宗大佐

「アメ公と仲間になるとは思ってもいなかった、
気はなのらないが同じ戦車乗りとして仲良くしろよお前たち」

「はいっ！」

戦闘309 飛行隊隊長野々村隆志大尉

「くれぐれも仲良くするように、奴らを刺激すると
倍返しでは済まされない」

・
・
・

着々と戦力を蓄える日本軍

翌日の搜索では人はいなかったものの九七式中戦車を3両
その次の日には二式水上戦闘機を1機、
さらに九六式陸攻2機と一式陸攻3機が発見された所で搜索は終了
する。

その後数度にわたるトリスティンの女王との談話は適当にやっておき
異世界にきてから1年がたった。

石原総司令官の部屋にディートリヒ・ケンペル少佐がやってきた。

「司令官殿、工場の建設が終わり弾と兵器の生産ができるようにな
りました」

「本当か!？」

「ええ」

「つとすれば補給上の悩みはなくなった!」

「それはありません、工場は非常に小規模で町工場レベルです。
大量生産は不可能で弾の使用を節約しなければ生産が間に合わず
結局物資は尽きてしまいます」

「…そうか、だがないよりはマシだ、工場はケンペル少佐に任せよう」

「わかりました!」

二週間後、石原らに乗せた一式陸攻、それを護衛する濱口、五十嵐らが搭乗する

零戦9機が王都「トリスタニア」を目指す。

8話：場違いな工芸品【後編】（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております

9 話・男の死はでかい

・ ・ ・

王都が見えてくる。

学園の人、城の人が才人の為に作った滑走路に10機は着陸する。

「おお、竜の羽衣が沢山！」

「でもあのでっかい竜の羽衣みたいなのはなんだ？」

タッタッタツ…

今回のメンバーは石原宗一郎守備隊総司令官に加え海軍の木下四郎中将、

濱口ゆ五十嵐、野々村といった陸攻を護衛する戦闘機パイロット。

上官二名の護衛を行う5名の陸軍兵士である。

「こちらでございます」

案内人が案内した場所は前に濱口とアンリエッタが話した場所ではなく会議室だった。

…と行っても日本政府のものより立派であった。

向こうからもアンリエッタ女王と政府高官、アニメス率いるトリステイン銃士隊が

入室してきた、本日は日本人の姿はないらしい。

またルイズのお叱りもなかった。

流石に將軍クラスの二人はそれなりの軍服を着用していた。

「直接お会いしたのははじめてだったからし、はじめまして私トリステイン王国女王

アンリエッタ・ド・トリステインと申します」

「うむ、私はトム島守備隊総司令官石原宗一郎でございます」

「第7艦隊司令官木下四郎です」

「よろしくおねがいますね」

「えつゝとあとはお会いしたことある人だけですな」

「お若いな」

「ええ、先代の王がなくなられてそれで」

「そうか…天皇陛下でもあることではある」

「では、早速本題に入りたいと思う、

確かトリステイン国は我が軍と同盟を結びアルビオンを制圧した
ということでしたな」

「ええ、これ以上この国を攻撃されたくありませんし
それは戦争の早期終結にも繋がります」

「ほかの国と組んだらどうですか？」

「いえ、私の目には日本軍しかごいません」

「そうか…あいにく我が軍はあまり戦闘を続行できる力がないので
す、

大規模な戦闘は避けたいのです」

「そうですか…どうしましょう…」

アリンエツタが悩むと野々村が

「あの、ちょっとよろしいですか？」

「えっ？ああいいぞ」

民族

「アルビオンって国は上空にあるんですね？」

「そうです」

「なら俺たち戦闘309飛行隊に任せてください！」

「しかし君の部隊はこれまでの戦闘でつかれきってるのでは…？」

「いえ、大丈夫です！ 士気は皆高いです！！」

「…そうか…では309飛行隊のみんなにはがんばってもらおう…」

こうしてトリステイン軍と日本軍は軍事同盟を結び共にアルビオンの撃滅を

図ることとなった。

だが事件はおきた、基地に帰還する時であった。

攻撃機1機、戦闘機9機は離陸しすでに王都から離れようとした所であつた。

正面から航空戦艦1隻、竜数十匹が飛来、

「正面から戦艦一隻！ 竜数十匹！」

「こんな所にくるなんてなんだあれは？」

すると戦艦が大砲を放つて来た

「くそお…奴ら俺たちの敵らしいぜ」

「間違いない！ あれはアルビオン軍です！」

「なんだと？ 奴らは俺たちを完全に敵だと思ってるらしいな」

「敵は戦艦に乗っている、砲火に気をつけながら敵竜騎士を撃滅せよ！」

「それと同時に敵から司令官機を護衛しろ！」

一方地上、トリスタニアの住民達は -

「敵だああ！！！」

「アルビオンが攻めてきやがった!!」

「見ろ！ 竜の羽衣がたくさんいるぞ！」

「くそお！ がんばれよ竜の羽衣！」

ブオオオオ！

ダダダ…

いつものように日本軍はアルビオン軍を圧倒する。

ダダダ… ブオオオオン

ダダダ…

ダダダ…

「敵が多い、おまけに敵の砲火が俺たちを狙ってやがる」

「こんな戦闘は久々だ」

ダダダ…

ダダダ…

その時！ 一発の艦砲が一機に命中！ 野々村機だ
いくら威力がないとはいえ同時期の戦闘機からみれば紙程度でしかない

零戦の強度では耐えられなかった…弾は翼に命中し野々村の零戦は炎上する…

それにいち早くきがついた濱口少尉
「あっ！ 隊長！！」

ほかの隊員も気がつく、

「隊長！！！！」

「野々村大尉！！」

だが野々村の生還はほぼ不可能。

野々村は心にこう思うのみであった。

（生きて帰れ、生きて帰るんだぞ！！

それが、トム島魂だ！！）

燃え上がる零戦は敵艦に体当たりを行つた…

海軍大尉：野々村隆志 異界上空に眠る・・・

享年31歳…

その後木造の戦艦は火が燃え上がり数十分後陸に落ちる…

乗組員達はトリステインの捕虜となった。

またこの戦いで始めて零戦を損失した…戦争中53機を撃墜した撃墜王も悲惨な最期を

向かえた…

だが野々村は生きていた…

その不屈の闘志は…隊員達の心の中で生きていた…

9 話・男の死はでかい（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております
あと野々村大尉のご冥福をお祈りします。

10話：アルピオン上陸作戦

トム島海軍航空隊総司令官関口四郎大佐

「…そうか…惜しい男を亡くしたな…」

無念にも艦砲射撃が命中、燃え上がる零戦で敵艦に突撃に亡くなった戦闘三　九飛行隊隊長
野々村大尉…彼の活躍で敵の戦艦は落ちた…彼は二階級特進により中佐となる…

「…なあ濱口」

「はい！」

「彼がいなくなった309飛行隊は誰が指揮できる？」

「えっ？」

「濱口、お前は隊長になるに等しい人材だ」

「腕も、中身も、すべてがな」

「頼めるか濱口？　お前が戦闘309飛行隊の隊長になってくれ」

「はっ…はい！　喜んでその任、お受けいたします…！」

こうして濱口少尉が亡き野々村の後を継ぎ戦闘三　九飛行隊の隊長に着任する。

またこれまでの戦果が認められ中尉に昇進した。

当初から人気であつた濱口が後を継いだ事は皆から喜ばれた。

「よし！ 本日の訓練はこれにて終了する！」

「はいっ！」

「明日は実戦だ、皆よく休むんだぞ」

「はいっ！」

「では本日はこれにて解散！」

「濱口少…いえ中尉、どうでしたか？」

「以外と疲れるな…隊長は大変だ」

「いいですね、俺なんか今だに曹長ですぜ？」

「日本軍は厳しいからな」

「明日はいよいよ実戦ですね」

「本来なら焼け跡から立て直した家でゴロゴロしていたらうにな・
・今頃」

「…」

濱口にとって 昇進などあまりうれしいことではなかった
それより故郷に帰れたかったのだ…夜…

「おやすみなさい」

「なあ五十嵐い お前は戦争好きか？」

「えっ？ あっはいお国の為なら！」

「俺は検閲なんてしないぜ、気軽にいいな」

「えっ？」

「当の俺があまり好きではない」

「軍人なんてほとんどそんなもんだ、愛国心から軍に入隊しても
実戦となって戦いが長期化すると嫌になる」

「俺は今まさにそれなんだ、しばらく故郷で家族と一緒に休みたい」

「…」

「つらいんだ、二度と愛する者に会えない事や愛する土地に足を踏
み入れられないことが」

「夢なら覚めてほしい、日本は負けてしまったが故郷に帰れるだけ
でうれしい。」

でもいきなりこんな神隠しにあって…」

「今頃どうしてるんだろうなあ…お袋や弟に妹達は…」

「アメリカのやろううになにかされてなければいいけど…」

・
・
・

「明日は早いし、寝るぞ五十嵐」

「あつ はい！」

翌日…

ブオオオオオ…

309 飛の零戦22機、九六陸攻1機 一式陸攻1機 九七艦攻1
0機、陸軍第120飛行戦隊の
隼18機、九九双軽15機、ドイツ軍のbf109G、さらに当初
は航空兵力のみと
言っていたのだがそれは流石に難しいということになり陸軍を落下
傘部隊として
上陸させることを決定、輸送機2機とトリステインのレドウタプー
ル号、ヴュセンタール号、
さらに才人の零戦を研究して新造された東方号などの艦船がアルビ
オンへ飛行中であつた。

濱口機の後ろに突然零戦がやってきた、どうやら才人は零戦で戦う
らしい。

いつも思うことだが乗ってるだけでたいして役にたたないルイズを
何で

乗せているのだろうか？ だがそんなことはどうでもよかった。

ちなみに輸送機だけでは兵員を運びきれないのでトリステインに頼み日本兵のほとんどは

トリステイン艦船に乗り込んでいる。

また東方号には第三戦車連隊の戦車や日本製の高性能火砲が積まれている。

ブオオオ...

「あいつは平賀才人つと言ったか、あいつもこの戦いに参加するらしいな」

「濱口隊長！ 右前方11の方向に敵艦！」

「よし！ 艦上攻撃隊に攻撃命令を下す！ 敵艦を攻撃せよ！」

空中のため航空魚雷は意味がない、そのため攻撃機には魚雷のかわりに数発の爆弾が搭載されている。

敵の艦砲射撃が航空機を狙う。

しかしなかなかあたらない、

木造艦の为一発でも爆弾を命中させれば炎につつまれ撃墜が可能であった。

アルビオン上陸までに敵の軍艦を多数撃墜。

日本軍は戦闘可能な艦艇数は10隻まで減らすことに成功した。

…一方陸軍とトリステイン軍は…

「敵が上陸してくるぞ!!」

「迎え撃て!!」

落下傘部隊は全員が着地することはできなかった。

日本軍の参加兵力1200名のうち89名が上陸前に死亡、トリステインも大きな損害を

うけた、しかしほとんどの兵士が無傷で上陸に成功、また火砲や戦車も無傷で上陸に成功した。

ダダダ・・・

ダダダ…

ドウン!!!

「ぐあああ!!」

「あああ!!!!!!!!」

「うああああ!!!!」

「突撃い!!」

「砲を撃て!!」

ドウン!!! カアアン

「くそっ！弾かれた！」

「戦車隊は歩兵を援護しろ！ 中戦車2台は敵の砲兵を倒せ！」

ガアア…

「踏み潰せ！！」

ガシヤアアア…

ダダダ…ダダダダダ…

・ ・ ・

守備隊総司令部 -

「閣下、アルビオンの軍港を占領したとの電報が入りました！
航空機が着陸できるスペースもあります」

「そうか！ やったか！」

（結局…航空兵力だけの戦いではなくなったが…どうやら我が軍の
損害も

少ないらしい…よかった…）

こうして戦闘309飛行隊が主となった攻撃で敵の空軍力を削るこ
とに成功し

また敵の軍港がある「ロサイス」を占領、国同士の正式な戦いで戦

いで久々に勝利する

ことができた日本軍はさらに軍を奥に進めアルビオン攻略を図った

一方トリステイン -

「女王様、私たちまったく活躍してませんね」

「それだけ日本軍が強いらしいですね」

10話：アルピオン上陸作戦（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております

11話：アルビオン突進作戦

1946年3月10日：本日は陸軍記念日である

アルビオン上陸部隊の指揮についたのは石原の参謀である平岸少将であつた。

「我が軍は上陸、ロサイスの占領に成功した」

「しかしこれだけでアルビオン軍は降伏するはずがない」

「そこで我が軍は王城を陥落させるかアルビオンが降伏するまで戦闘を行うことにする」

「まず、アルビオンの王都、ロンディニウムまで行くのだがこの作戦には3つの

問題点がある」

「ひとつは非常に広いことだ、皆もわかるであらう、長いだけに補給線が

伸びきってしまうのだ」

「ふたつめはシティオブサウスゴータという大都市を突破しなければならぬ、

ここの突破には相当苦勞するだらう、兵力も多い」

「最後の問題点は王都までの道のりまでに敵陣が多すぎることで、いくら敵の装備が貧弱とはいえ、1200名の我々からみれば何十倍、いや何百倍かも

しれない兵がいる」

「普通の攻め方では2ヶ月起つても堕ちない」

「物資もない、急がねばならん」

「進軍したら一步も引かずに突進だ。戦闘部隊はただ敵中を突破せよ！」

後を振り向くな！ 残る敵は後続の部隊にまかせろ！ 突進、突進、真っ直ぐ

ロンディニウムを目指して突進だ！」

平岸は山下がマレーで行った突進作戦を決行することとした。

突進作戦とは文字通り一步も引かずひたすら前進するものでありこの作戦で山下はマレーを短期間で日本のものにすることに成功した。

このアルビオン攻略作戦は海軍から次第に陸軍が主体となっていた。た。

緒戦の海軍の活躍も中盤になってくると出撃回数が減ってきたのだった。

一方のトリステインは慎重な行動をとることになった。

こうして翌日、両軍によるアルビオン占領競争が開始された。

3月11日午後9時…

タッタッタツ…

ガアアア…

歩兵と戦車がこつこつそり、こつこつそりと敵陣に近づく、日本軍お得意の夜襲である。

…
「…攻撃開始！」

ドゥン！！！！

バババババ…

ダアアアン！！

「敵襲…！！！！！」

ババババ…

ダダダダ…

ドォン！！

ダダ…ダダダダ…！！！！！

「おのれ…騎兵隊よ行け！」

「うおおおおお！！！！！！！」

ドォウン！！！！

「うわああああ！！！！！！！」

ダダダ…ダダダダ…

第一の敵陣はかなり大きな物であったが1時間もしないで突破した。戦死者は3名、負傷者は5名である。

3月13日、「キーレル」を占領
続く3月15日「レコー」を占領。

3月18日「ミスタル」占領していった。

非常に長いサウスゴータであるが3月末までに夜襲を繰り返し約半分を占領した。

だが戦闘が長引くにつれて次第に兵力を落していくのであった。
1200名いた兵士も824人にまで減る。

「ああ、明日は何人生き残るんだ？」

「そもそもこの戦いは勝てる戦いなのか？」

「さあな、この先は敵の大要塞シティオブサウスゴータがある、
あそこで多分100人くらいまた死ぬだろう」

「むしろ今までの戦死者が少なかったのが奇跡だぜ」

「まったく平岸少将はいくらなんでも敵をなめすぎだ
装備がいいからって兵士を酷使すると疲れきって行動不可能になるぞ」

「マレーにいた兵士はレベルが高かったんだろうが俺たちは実戦に参加したことが

ないんだぞ？」

「やれやれ、俺たちは生きて帰れるのかな？」

その頃口サイスに滑走路を建設した日本陸軍はこの戦いにおいて最も日本軍を苦しめた

竜騎士対策として隼50機、鍾馗8機、しまいには旧式の九七戦8機まで配備した。

さらに地上支援の為九九双軽10機が配備された。

これらがあつまつた航空隊を「特設第一飛行戦隊」と日本軍は名づけた。

配備された翌日から航空機の運用が始まりまた後続部隊1000名とアメリカ軍戦車連隊の

シャーマン7両が追いつき日本軍の進撃はさらに加速、シティオブサウスゴータまで1日で

到着した…そして

4月2日…

タタタタ…

タタタ…

シティオブサウスゴータ守備隊エールトス大佐

「…」

・

・

・

ガアアア…

・

・

・

「今だ！ 攻撃開始！」

パン！

火縄銃だろうか、アルビオン軍が発砲したきた。

ダダダ…

ダダダ…

「日本軍の進攻を止めるのだ！ このシティオブサウスゴータで！」

ダダダ… タダダダダ…

ダウン！！ ドウン！！

ガアアア…

シティオブサウスゴータ、ここで始めてアルビオン陸軍は日本軍に
対し組織的な
反撃を行った。

ダダダ…

ダダダ…

バン！ タタタ…

ドウン！！！！

シティオブサウスゴータは日本軍にとっても、アルビオン軍にとつ
ても戦略上

重要な拠点である、そのシティオブサウスゴータを死守すべくアル
ビオン陸軍の

エールトス大佐は決死の反撃を行う。

新たに配備した竜騎士18を配備、装備は貧弱でも最初から制空権をもっていた事、

日本軍の空港が離れていたことにより航空機の到着が遅れたこと、シティオブサウスゴータの市街地をうまく利用した戦法をとったことで

明らかに実力の違う日本軍にアルビオン軍は善戦していた。

日本陸軍にとってもハルケギニアにきてからこれほどの苦戦は経験したことがない、

後援部隊をあわせて約1800名がいたのだが1430名まで減ってしまった。

しかし

ブオオオオオ！！！

ヒュウウウウ ドゴオオオオン！！！！

バババ…

ダダダダダ…

航空機による支援が行われるようになった。

また次第に冷静さを取り戻した日本軍は反撃に転じた。

4月9日、一週間にわたるシティオブサウスゴータの戦いは日本軍の勝利に終わった。

この戦いで両軍に大きな損害をもたらした。

だがアルビオンにはもう戦う力がなかった…

予備兵力の大半を使い果たし抵抗できる戦力などもうなかった。
4月10日より再び進撃が開始されまたこの頃になるとトリステインとの一番乗り競争も始まっていた。

「ん？」

敬礼をする

「君達はどこの部隊だね？」

この部隊の隊長はアンリエッタの指名でルイズだった

「アンタ平民の癖に調子のりすぎなんだよ、
一応答えるけど」

「ちょっ ルイズ失礼だろ！」

「俺たちはトリステイン第三師団です」

「そうか、残念だったね、私の部隊はさっきここを通過したよ

「なっ…なんですって…」

「おそかったあ…」

4月12日サウスゴータを突破

4月15日にはロンディニウムを陥落させアルビオン軍は降伏した。

その後アルビオンはロサイス側を日本が、ロンディニウム側をトリステインが
シティオブサウスゴータをさかえに占領した。

1ヶ月半に及ぶアルビオン攻略は日本軍、トリステイン共に多くの
損害をもたらした。
日本軍は約800名が、トリステインは5800名の兵士が亡くな
った。

日本軍の死者のほとんどがシティオブサウスゴータの戦いで戦死
者である。

この戦いでいかに劣勢のアルビオン軍がすごい戦術で戦ったかが伺
える。

だがこの戦いではアルビオンが負けた、己の無力さに気がつかず勝
手に国をかえ
自分で戦争をおこししかも負けたという…

だが日本軍の戦いはまだ終わってわけではない、新たな脅威が待
っているのだった

11話・アルピオン突進作戦（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております

山下は私も大好きな軍人です

12話・赤とんぼ

アルビオン戦争から戦後2週間がたった。

一方軍需工場では零戦52型が一機製造された。

これは損失した零戦を補う為のものである。

しかし零戦を操縦できる人間がほかにいなかった。

「パイロットがほしい」

「折角一機零戦ができあがったというのにパイロットがほしい！」

…というわけで濱口はパイロットを補充するため宣伝ビラを撒いた
神聖アルビオンを倒し一躍有名になった日本軍に入りたいと思う平民はたくさんいた。
そのため応募は殺到しその中から3名、厳しい適正検査を行い選出する。

こうして選出されたのは…

トリステイン国籍のハーボット（18歳）

ガリア国籍のブルツク（17歳）

ゲルマニア国籍のシュタイナー（19歳）

この3人である、いずれも20歳未満の未成年であるがそれが濱口にとって

でっかい希望であつた。

「皆、よく志願してここまで来た、だが訓練はとても厳しいものだ、覚悟はできているな？」

「はい！！！」

三人の若鷲達は元気よく返事をした。

訓練は基礎体力をつけることから始まつた。

「空中戦を行うと相当のGがかかる！ そのGに耐える為体力、そして精神力が必要だ！」

濱口にとってはじめての教官という役目である。

自分がそうであつたように若鷲達には厳しく指導する。

午後、勉強

「軍人は体力だけあつてもつとまらない、特に飛行兵は操縦の仕方を学ばなければ

ならない、勉強もできてこそ一人前なのだ」

「はい！！！」

どんなに苦しい訓練でも、どんなに厳しい訓練でも、若鷲達は耐えた。

ハルケギニア出身の若鷺達はとても飲み込みが早かった。
5月の末頃には体力さえあれば操縦できるほどであった。
この驚きの早さでの上達には教官である濱口もビックリ物だった。

6月1日、本日は濱口26歳の誕生日でもある。
その日に若鷺達の初飛行が行われる…

若鷺達が乗る機体は九三式中間練習機、
赤トンボの愛称で親しまれるこの機体は日本の名練習機である。
戦争末期にはこの飛行機で特攻に行かされた若鷺もいた。

「よし！ 三機とも回せ！」

整備兵はスターターを回しスターターが充分回った事を確認しエンジンをつける。

「コンターックー！」

この訛りは永遠に直ることはないだろう、
教官の濱口がそう覚えているからだ。

ブロー…ブローブロー…

回転数の低いちょっと古めかしいエンジン音が鳴り響く。

「よし！ 離陸を開始しろ！」

「はい！ー！」

こうして若鷲達は始めて飛行機で大空を飛ぶ…
若鷲たちは離陸を開始した…

若鷲の歌

若い血潮の予科練の

七つ釦は桜に錨

今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや

でかい希望の雲が湧く…

ブロロロ…

練習機とは大抵後部席に教官が座っている、
もちろん彼らにも教官はいた、五十嵐飛曹長などが後ろに乗り込んでいる。

3機の九三中練と後ろからそれを追い上げるもう一機の九三中練、
濱口だ、

彼はこの目は若鷲達の勇姿を見たかったのだ。

軍港付近を通過しここからちょっと行って急旋回を行い着陸するのが
今日のメニューだ。

現在その軍港を通過中である。

濱口を除く最もベテランの教官である五十嵐、彼が担当するのはガ
リア国籍のブルツク、

彼は最年少だが3人中もつとも操縦士として優れているという。

「なあブルツク！ どうだ初めての飛行は！？」

「はい！ 最初は緊張していましたが！ しかし今はちょっと楽しいであります！」

「そうだろ！ まあ緊張は永遠になかならないだろうけどな！」

「はい！ いつ何がおこるかわからないのが航空機です！」

だが彼らの訓練は終わろうとしていた、そして実践に入ろうとしていた…

12話・赤とんぼ（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております
ちなみに九三中練は零戦より
お気に入りだったりします。

13話・突然の戦争

ブオオオ…

4機の赤トンボが基地へ帰還すべく旋回を開始しようとした時であった。

横から多数の点がこちらに飛んでくるのだ。

この九三式中間練習機は現地改造で粗悪だが無線がとりつけられていた。

先頭のブルツシク機の教官五十嵐が無線で他機へ連絡する。

「こちらブルツシク機の五十嵐、3時の方向から謎の飛来物体がこちらに来る」

「なんだと？陸軍じゃないのか？」

「いえ…ひとつは飛行機に見えますが…」

「よし、全機に告ぐ、3時の方向の飛来物体を確認する、私についてこい」

そついうと濱口は前に出て右旋回を開始した。

ちよつと時がたつとその飛来物はなんなのかがハッキリした。

「あれは？…ガリアへ一機あげた赤トンボ！？」

「後ろには竜が！ 追尾されてるのか？」

そう、5ヶ月前、研究の為ガリア王国へ製造年数が一番古い九三式
中間練習機をあげたのだ。

その九三中練には日の丸ではなくガリアの国旗が描かれていた。

「！？ あの赤トンボやはり攻撃されている！」

ガリアの赤トンボを狙うのはアルビオンの戦いが終わってからすぐ
各国で戦力が強化された
竜騎士団だ。

「あつ！ なぜだ！？ トリステインの竜騎士もいやがる！」

「あちらはゲルマニア、ロマリアの奴らまでいやがる！」

一体なにが起こったのか？

さらに…

ドゴアアアン！！！！

「なんだ！」

「あつ！」

「ハーボット機が撃墜された！」

どうやら濱口たちの世界の兵器を狙っているのか？
単にガリアの同盟国とまちがえたのか？

そもそも何故ガリアと三国は戦っているのか？

幸いな事にハーボットらはパラシュートを装備していた為生還した。

「待ってるよ！ 後で必ず助けに行くからな！！！」

「濱口中尉！ 後ろに敵がついてきます！」

「振り切れ！」

「ダメです！ 敵には風竜もいます！ 低速な赤トンボでは振り切れません！」

「くそっ！ 戦闘命令を下す！」

流石に近くもハルケギニアにいろいろなと詳しくなっていた。だがそんなことはどうでもよかった。濱口達は自衛戦闘に移ることにした。

「俺は後ろの敵を相手する。残りの二機はガリアの赤トンボを助ける！」

「了解！」

濱口機が降下、左旋回で敵の後ろにつこうとする。一方残りの2機はそのまま敵の竜騎士隊へと向かって行った。

ダダダ… ダダダ…

旧式の赤トンボを巧みに操り敵の竜騎士を撃墜していく濱口。一方その頃

「五十嵐教官！ どうすれば！！」

「高度を下げる！ この位置での上昇は自殺行為だ！」

「はいっ！」

ブオオオオオオ

「敵が後ろにつこうとしています！」

「敵は左に旋回する！　こちらは右旋回だ！」

五十嵐の指示どおり操縦するブルツク、うまく交差し敵の後ろについた。

「今だ！　機銃を発射しろ！」

ダダダダダ…　ダダダダ…

「落しました！」

「よし！　一機撃墜だ！」

「あっ！　私の国の赤トンボが狙われてます！！！」

「距離が遠い！　援護射撃だ！」

「はい！」

ダダダダ…

トリステインの竜騎士は被弾を恐れ追尾をあきらめた。続いてゲルマニア、ロマリアもあきらめていった。

「ん？ 下も、急降下で機銃を撃て！」

「はい！！！」

ブオオオオオ...

ダダダダ...

「やりました！」

「そのまま流すように右に旋回し2時の方向にいる敵にも機銃を撃て！」

ダダダ...

ダダダダ...

「よしっ！ 初陣で3匹撃墜か！ お前はいい操縦士になりそうだ！」

「ありがとうございます！」

「だが油断はするな！ まだ戦いは終わってないぞ！」

「はい！」

「...あっ！ あれ！」

「ん？」

五十嵐が横をふり向くと目にうつったのは木っ端を撒き散らしフラフラしながら

飛行するガリアの赤トンボだった。

「くそっ！ 奴はやられた！」

ガリアの赤トンボに攻撃を仕掛けた竜騎士の後ろに濱口が、

「大和魂を見せてやる！」

ダダダダダダ…

2匹いつぺんに撃墜した。

10分後…連合竜騎士団は撤退を開始した。

無事基地に帰れたのは濱口機とブルツシク機のみであった

シュタイナー機は大勢の敵の集中砲火をうけ蓄戦空しく撃墜されてしまった。

濱口のほうに軍医があるいてきた

「先ほど海軍の船乗りさんがハーボットさんと柳沢さんを運んできてくれました

二人とも軽症です」

「よかった…もう助けられたのか…」

落ち着いた濱口に軍医はもう一言言う

「そうそう、さっきここに飛行機が不時着してきました、

「ガリア国籍の人でしたがなにかあったのですか？」

「さあ、わからんな、その人に話をきかないと」

「まあ彼女もたいした怪我はしてませんので」

「ん？ 女性なのか？」

「ええ」

「なるほど、とりあえず事情を聞きたい」

「今彼女は寝ておられます」

「そうか、では起きたら教えてくれ、俺も一眠りする」

「タッタッタッ…」

「濱口がブルツシクと五十嵐に近寄る。」

「本日はご苦労だった、五十嵐、お前の指導がよかったんだな」

「いえいえ自分は濱口中尉には足元にも」

「まあ、俺もお前もベテランにかわりはない」

「とりあえず本日はこれにて解散だ、ブルツシク、今日はもう休め」

「はい！」

夜 -

ガチャ

「ん？ 軍医の笹川か」

「彼女の目が覚めました」

「ああ、わかった」

タッタッタツ…

濱口は病室へとむかった…

13話・突然の戦争（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

14話・戦争は学院から始まる

ガチャ…

「あつ！ 隊長！」

「おう笹川！ お前は元気そうだな」

「はい！ 2、3日もすれば実戦部隊に戻れるそうです！」

「よかったな！ハーボットも元気そうだなによりだ！」

「はい！ すぐにまた訓練に戻るようがんばります！」

「こちらの部屋に彼女はいます」

「ああ、わかった」

ガチャ…

扉をあけるとちよつと幼くみえる少女がいた。
彼女は本を読んでいた。

「では私はこれで」

軍医が去ってゆく…

部屋には濱口と少女の二人っきりであった。

タッタッタ…

「あなたは？」

「俺は戦闘三 九飛行隊隊長、濱口健介って者だ」

「ここは？」

「病院みたいな所さ、負傷者はここに運ばれる」

「君の名前は？」

「タバサ、」

タバサと名乗る彼女、青い髪と瞳をもち小柄であった。

「ところで傷は大丈夫か？」

「たいしたことはないよ」

「そうか、なんでアンタ追われていたんだ？」

「うちの国の留学生が原因」

トリスティン魔法学院は国籍も階級もなにすらも関係ない学校であり
ちよっとした些細な事が戦争につながる事がある。

その些細なことでタバサは命を狙われていた。

ガリア国籍の留学生10人が学院の女という女をレイプしまくりさ
らに殺害まで

していたという、学院は10人を退学にさせたが各国の怒りはとどまらず
ハルケギニアのほとどの国がガリアに宣戦布告、戦闘を開始したの
だった。
まず各国の目はガリア王国の王族であるタバサに向けられ殺害され
ようとしていた。

「いつもはシルフィードに乗ってるんだけど、今日はたまたまどこ
ぞのものとも

しれない赤い飛行物に乗ってたら…」

彼女が言うに敗因は九三式中間練習機に乗っていたことらしい。

（いやどう考えても竜より赤トンボのほうが高性能だろ…ちょっと
古い機体だけど）

「最悪…いままで仲がよかった人にまで狙われてる…」

「お父さんは殺されるし…お母さんは…」

「そうか…お互い大変だな」

「こっちも散々仲間はずつ殺されるはようやく戦いが終わったと思
ったら

こんな世界に飛ばされてしまうは」

「助けて」

えっ？

「あいつらから…助けて」

タバサにとってあいつらとはトリステイン、ゲルマニア、ロマリアなどの国のほか
それまで仲良しだったキュルケ、さらに好きだった才人まで含まれている。

もはや彼女の心の中は自分が生き延びる為、国のためのほか
身近な人物に対する恐怖心でいっぱいだった。

「タバサ…だったね、貴女の気持ちはよくわかった
だが我が軍はほかの国より装備品が優れているといえ
三国を相手にするのは流石に厳しい、弾が足りない」

「お願い…」

（なんだ！？）

タバサが急に抱きついてきた…

（大人しそうに見えて大胆な奴だ…）

（まずい！！ このままでは全年齢対象じゃなくなってしまう！！）

（そもそも好意でやっているわけではない、女の子限定おねだり作戦だろこれは）

（俺は五十嵐じゃないんだ、若い女子に手出しはしないぞ！！）

「わ…わかったから離れて」

「うん」

落ち着いた表情で答えた、やっぱりおねだり作戦だったようだ

翌日、石原総司令官の下へ行こうと思ったその時だ

「濱口中尉！ 出撃です！」

「なにがあつた！？」

「軍港がゲルマニア海軍の大艦隊に攻撃されています！」

「なんだって！？」

「航空兵力による支援が欲しいとのことですよ！」

「よし！ 艦上用爆弾は！？」

「とりつけてあります！」

「出撃だ！」

一方総司令部・

「まさか宣戦布告されるとは、一気に三国から」

「たまたま不時着したガリアの飛行機の操縦士を引き渡さないかぎり攻撃を

続行するらしいです」

「閣下！ すでに我が軍はシティオブサウスゴータでトリスティン軍と戦闘状態ですよ！」

「なんだと！？」

「くうう…もはや戦争はさけられないのか！？」

「やはりあの少女を引き渡すしか…」

「停戦の為に若き人間を殺す気は私にはない！」

「しかし…」

「いいのだ、こうなることはだいたいわく知っていた…」

「えっ？」

「かりに女の子を引き渡したにしても、今度は1500万人の人口中780万が軍人と

いうガリア王国と戦争になる」

「結局の所、戦いは避けられない」

「三国に、徹底抗戦を宣言する！」

こうして石原中将は正式にゲルマニア、ロマリア、そして同盟軍であつたトリステインとの

開戦を決意した。

一方軍港では309機の活躍もありせめて来たゲルマニア艦隊の撃退に成功した。

ガリアの10人の留学生が行つた犯罪、この些細な事で日本軍トム島守備隊は

世界大戦規模の戦争に巻き込まれることになる…

14話・戦争は学院から始まる（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

15話：トリスティー浜上陸作戦！

開戦が避けられない状況に陥った日本軍トム島守備隊はやむを得ずトリスティン・ゲルマニア・ロマリア連合軍と戦う事になった。

・
・
・

陸海軍会議 -

「まずは、アルビオンの半分と島の近くにあるトリスティンを倒すべきだと思う」

「それについては私も同意です」

「トリスティンはそれほどすごい軍事力を持っていないましてやこの島はトリスティン囲まれている」

「戦略上もトリスティンは重要そうですね、補給場所に使えるそうです」

「先にトリスティンを倒しゲルマニアを倒す、ロマリアはガリアに任せておくんだ」

こうして日本軍は始めにトム島の近くのトリスティン王国の浜から大規模な上陸作戦で行われることになった。

309 飛本部 -

ガチャ…

タバサが入ってきた…

「どこいくの？」

タバサが話しかける

「戦場だよ」

本当は哨戒なんだが、まあそれも戦場に行くのとかわからない

「戦うの？」

「そうなってしまった」

「タバサは負傷している、大人しくしている」

「健介…気をつけて」

「ああ」

（てゆうーかこいついつのまに下の名前で呼ぶようになったんだ…どうでもいいけど）

コンコンッ

「入ってよし」

ガチャ

戦闘299 飛行隊長楠目大尉

「濱口中尉、偵察機が大変なものを撮影したらしい」

「本当ですか？ 現像してください」

いくら同じ隊長とはいえ楠目は濱口よりも階級が上である

階級こそがすべての軍隊ではそれが厳しいため隊長同士でも敬語で話さなければならない。

「おお…これは…」

「敵が浜に兵力を集中している、これでは陸軍が満足に上陸できない」

「楠目大尉！司令部へ連絡しましょう」

ジリリン…

古くさい電話のベルになる。

「こちらトム島航空隊総司令官関口です」

「関口大佐、こちら戦闘299と戦闘309でございます、

浜にはトリストイン軍が多数います、このままでは陸軍が満足に上陸できません、

攻撃許可を」

「うむ、これは戦争だ、出撃を許可する」

ブロロロロロ…

戦闘299・戦闘309飛行隊は

爆弾搭載零戦42機、爆弾搭載九七式艦上攻撃機20機、九九式艦上爆撃機3機

九六式陸攻1機と一式陸攻2機を敵の撃滅の為「トリスデー」浜へ向かわた。

濱口、楠目は零戦に乗り込む。

ブオオオオオオオオ...

多数の航空機が離陸していく。

荒鷲の歌

見たか銀翼この勇姿

日本男児が精こめて

作つて育てたわが愛機

空の護りは引受けた

来るなら来てみる赤蜻蛉

ブンブン荒鷲ブンと飛ぶぞ...

ブオオオオオオオ...

守備隊総司令部 -

「海軍が浜に集結した敵の撃滅の為攻撃隊を向かわせたいです」

「そうか...がんばってくれ」

「この戦いには我々の為にも...なんとしても勝たなければならない
！」

ブオオオオオオオ...

「今日は運がいい、敵の竜の迎撃がないらしい！」

「ええ、」

トリスディー 浜まで到着すると次々に爆弾を投下してゆく

ヒューン

ドガアア

「なっ！！ なんだあ！！」

「竜の羽衣がへんな鉄球を投下してその鉄球は爆発した!!」

「うああああああ!!!!!!!!」

ドガアアア!!!!!!

ドオン!! ドガアアア!!

「ん? 一機がこちらにやってくる…味方か」

バババ…

ドゴオオ…

「九七艦攻が撃墜された…敵だ! 敵が迎撃にきた! 機種は零式戦! 平賀才人の機体だ!」

濱口は直ちに才人の零戦の方向へ向かう、
ようやくちかづいたところで攻撃機3機が撃墜されていた。

ブオオオオ!!!!

「くっ! 流石に戦闘機は手ごわい!」

一方才人 -

「日本人同士で殺し合いなんかしたくない…でも命令なんだ…
ごめんよ!!!!」

バババ…

一式陸攻が一機撃墜される…

その時！

「はっ！　しまった！」

「平賀才人！すまん！」

ババババババ…

才人の零戦は火を吹く…零戦は海に墜落

平賀才人…死亡

享年18歳

ブオオオ…

「本当にすまん…同じ日本人でありながら…」

濱口は気まずくなつた…同じ血が流れ大和魂を志す同志を殺してしまつた…

だがこれは戦争である…そんな事にいちいち悲しくなっていては戦えない。

しかしどうもつらいのであつた…

その後陸軍は何事もなく上陸に成功、王都「トリスタニア」を目指し東進する。

翌日、二つの花束が砂浜に投下された。

一つは戦いでなくなった日本兵、もう一つは平賀才人のためのものだった。

才人の死は全世界に広がった、これを機にルイズは人前に姿を見せなくなった。

トリステインの国民は全員怒り狂った、ゲルマニア、ロマリアにも怒りがひろがって行った。

三国は総力戦を行うことにしたのだった…

15話・トリスデー―浜上陸作戦！―（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

16話・ダングルテールの戦い

6月6日：上陸した日本陸軍はトリスティンに上陸した、日本陸軍は操縦士達の負担を和らげる為滑走路を建設する必要があった。

そのためにダングルテールを手中におさめる必要があった。

そこでアルビオンからすべての戦車を撤退させすべての戦車をトリスティンへと送った。

今回の戦いは第3戦車連隊のみでの戦いとなった。そのため指揮官は第3戦車連隊長辻吉宗大佐となった。

「ダングルテールは滑走路を建設するのに必要な土地であり
また今後ゲルマニアとの戦闘を考慮し滑走路は絶対必要なものである」

「その建設には我が戦車連隊が総力を挙げて敵を倒さなければなら
ない」

「はい 質問です、もし戦車と遭遇した場合我が軍はどうすれば
？」

「心配はない、敵軍は戦車をもっていない、もっていたにしても
運用方法がわからないだろう」

第3戦車連隊は敵陣があるダングルテールの漁村へ軍を進めた

戦車隊の歌

一番 大地揺るがし砂塵上げ 無敵戦車の行くところ 疾風迅雷醜敵を 奇襲急襲撃滅す 燦たり我等戦車隊

二番 鬼神さながら火焰吐き 怒号天地にこだまする 十字砲火の只中に 率先開拓く突撃路燦たり我等戦車隊

三番 鉄軌唸りて轟轟と 雲霞の如き敵中に 突進轟進将た挺身死命を制す追撃戦 燦たり我等戦車隊

四番 万雷轟く機関の音 鉄壁相摩す機甲戦 堅き団結揺るぎなく 猛撃反転粉碎す 燦たり我等戦車隊

五番 威風堂堂聖旨を承け 無敵戦車の行くところ 大和魂華咲きて 勝利の誉れ我に在り 燦たり我等戦車隊

ガアアア…

「うゝ…敵がまったくでてこない」

「もしかして我々はダングルテールの漁村へ向かっているのを知っているのでは？」

「ここはアメリカ力ではない、奴らが暗号を解読できるはずがないのだ」

だがトリステインは読んでいた、

ダングルテール漁村守備隊指揮官パーシバル將軍

「敵は竜の羽衣を飛ばすための施設を建設するためかならずここを狙う、

戦力は充分だ、後は敵を撃滅するのみだ！」

7日夜：ダングルテールの漁村付近まで戦車隊は迫った…だが

ガアアアア…

キィ…

「おかしい、敵兵が一人たりともでてこない」

「はやり潜んでいるかもしれませんね」

再び第3戦車連隊は戦車を進める、その時！

ドオウン！！！！

カアアアン！！

「敵が砲撃したきたぞ！」

弾は弾いたものの敵はやはり漁村に戦力を集中させていた。

各戦車の車長はハッチを閉める、辻吉宗大佐は命令を下す

「全車両！ 敵陣に突撃！」

ガアアアアアア...

敵の大砲を浴びても戦車はなかなかこわれない、

いくら日本の戦車が貧弱とはいえトリステイン軍の使用する大砲の弾は骨董品に過ぎず

鉄の装甲に当たれば弾が砕けてしまう。

装甲は5ミリもあれば充分である、従って八号でも充分でありチハに限っては

ダメージすら受けない、八号もちょっと傷がつくくらいであった。

ガアアアアア...

ガシヤアアアアン！！！！

一度も戦車砲を撃たず敵の大砲は踏み潰される！

「行けー！！ 一步も引くな！ 突撃！！」

なんとしても陣地を守りぬこうとパーシバル將軍率いるダンゲルテール漁村守備隊は抵抗する

「こちらも一步も引くな！ 突撃だ！ ひたすら前へ進め！」

戦車にかなうはずもなく守備隊の歩兵はほぼ壊滅した。

このまま日本軍の快勝かと思いきや...

「きた！ タイガーだ！！この陣地を守りぬいてくれよ！！」

「なっ！？ なんだあれは！！」

「せ…戦車だああ！！」

メイジ達がんばって操っている…あれはドイツが第二次世界大戦中開発した

ティーガー重戦車だ、ティーガー1とティーガー2が存在するがハルケギニアに

あったのはティーガー1らしい。

ただでさえ連合軍から恐怖的存在であつたのにその連合軍の戦車にすら

まともに戦えない日本の戦車が勝てる相手ではない

「落ち着け！ こちらも戦車に乗っている！ 一両なら大勢でかかれはなんとかなる！」

実際シャーマンが大勢でかかりティーガーに勝った、しかし九五、及び九七式ではとうてい無理だろう…

ダウン！！！！

カァァン！！！！

ダウン！！！！

カァァァン！！！！

「連隊長！ 私の戦車が放った弾は確かに命中しました！
しかし敵にダメージが見られません！」

「くそっ！ 装甲が薄い後ろから集中砲火をしかける！！」

…とはいってもこのティーガー1の後部装甲は80ミリ、日本軍の戦車砲が貫ける
限界の装甲をはるかに超えていた。

ティーガーが砲を放った

ドガァァァァン！！！！

ドオオオオオン！！！！

わずかな間に

九五式が3両、九七式が2両、アッサリ撃破されてしまった。

しかし！

「どうしたんだ！？ あれ以上撃つてこないぞ！？」

「しかも動きません！」

「やったぞ！ 弾と燃料が尽きたらしいぞ！」

「よし突撃だ!!」

後にトリスティン軍は撤退していった。

戦車を5両失うという被害をあけるも一台で日本軍戦車5両以上の戦力をもつ

ティーガー1を無傷で鹵獲できた。

道路を改造し地元住民を利用して7月1日には滑走路が完成した。

16話・ダンゲルテールの戦い（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

17話：隼は行く！

守備隊総司令部 -

「閣下！ 戦闘の結果アルビオンからトリステイン軍が撤退！

アルビオン全土を占領！ さらにダングルテールを占領しました！
そしてダングルテールに滑走路を建設しました！」

「そうか… よし、アルビオンから航続距離に優れる隼を40機ダン
グルテール基地へ

送ってくれ、それと防空用に九七式戦闘機を全機ここに配備させ
てくれ」

「はい！」

こうしてダングルテールを拠点とする隼主力の陸軍航空隊が結成さ
れた。

ここにはドイツ軍のbf109Gも配備された。

航空隊隊長は陸軍の高橋少佐となった。

「我々の主な任務はラ・ロシエールを攻撃、占領して包囲されてい
るガリアを

救い出すというものだ」

「ラ・ロシエールには数百の竜騎士と数千の地上部隊がいる。

その竜騎士と戦い制空権を確保し第3戦車連隊を支援するのが任
務だ」

ブロロロロ…

隼のエンジンがうなる

タツ…サツササツ…

タツタツタ…

「おい柏葉！ 一枚とってやる！」

「はい！」

カシャ！

隼戦闘隊はラ・ロシエール周辺の制空権を手に入れるため飛び立つた…

加藤隼戦闘隊歌

一、

エンジンの音轟々と

隼は征^ゆく雲の果て

翼^{よく}に輝く日の丸と

胸に描きし赤鷲の

印は我等が戦闘機…

ブオオオオ…

「ラ・ロシエールだ」

「最近、この国のコルベールという奴が開発した対空砲が実戦配備されているらしい、気をつける！」

ドン！

ドン！ ドン！

高橋の情報は確かだった、対空砲といっても20世紀のものから見れば骨董品に

すぎないのだがそれでもあたれば飛行機は壊れる。

正面からは迎撃にきた竜騎士団が迫る。

ドン！

ドン！ ドン！

ドン！

対空砲火が激しい、それでも隼は竜騎士達を次々と落していった。

一機が対空砲に爆弾を落した、対空砲はぶっこわれ隼は軽くなった。対空砲を破壊すべく次々と爆弾をおとしていった。

ドオオオオン！！！！！！

どころが

ドゴオオオ！！！！！！

「あつ！ 柏葉！！」

「柏葉!!!」

「くっ……くそおお!!」

前方にはトリステイン軍の戦艦が
トリステインの戦艦は航空機撃滅の為やってきたようだ

「こくなつたら地獄の道連れだ!!!」

炎上する隼で柏葉は東方号に特攻した！

ドガアアアアアアアアアアアア！！！！！！

東方号はたちまち燃え上がり墜落した。

「柏葉アアア！！！！！！！！！！」

夜
-

「隊長は？」

「はっ！ 隊長殿は部屋にはいませんでした！」

外…木の下…

「おい柏葉…とうとうこの写真が最後の写真になっちまったな…」
「まってるよ…俺もすぐいくからな…！」

隼戦闘隊は多大な戦果をあげていった。

地上部隊なしで2日のうちにラ・ロシエールのほとんどを占領することができた。

その戦果が認められ高橋少佐は中佐に昇進した。

ある日の出撃だった…

ブオオオオオ…

「今日の戦いでおそらくラ・ロシエールを占領できるだろう」

「もうすぐそのラ・ロシエールです」

ブオオオオオオオオ…

はたして今回はいつもどおりの快勝か？

「隊長、最後の竜騎士隊が迎撃にきます！」

「よし、迎え撃つぞ！」

「隊長、竜の中になにかが！」

「ん？」

なんと竜の中にハリケーン戦闘機が2機まじっていた。

どこで手に入れたんだ？ 塗装はトリステインで塗られたのかトリステインの国旗が

記されている、これはきつとどこかにあったのを鹵獲、メイジが飛ばしているのだろうか？

それとも自国産？ いやそんなわけがなかった。

「隊長！ ハリケーン戦闘機が2機まじってます！」

「くそっ！」

ババババ…

ブウウン…

「うまい！ この世界でいう魔法でも使っているのか！？」

ババババ…

バババ…

ドガァァン！！

「よしっ…！！」

バババ…

ブウウン…

ダダダダダ…

ピッ！！！！！！

「！！！！！！！！」

ゴオオオオオ！！！！！！！！！！

「隊長！！！！！！」

「隊長殿！！！！！！！！！！」

ブウウウウウウウウウウウ…ドゴオオオン！！！！！！

「うつ…うつ…うつ」

「隊長…うつ…うつ」

・

・

・

の戦いでラ・ロシエールは日本軍のものになった・・・
だが高橋中佐というベテランをまた失ってしまったのだ…

後にハリケーン戦闘機はイギリス人がトリステインに残っていた
ものだ

判明、機体の状態がよかった1番機を鹵獲、修理を開始した。

高橋少佐は亡くなった、だが、彼はこの戦いで大いに活躍し
その栄光は永遠に隊員たちから忘れられることはないだろう…

17話：隼は行く！（後書き）

皆様方のご感想をお待ちしております。

なお今回は決断の14話にかなり影響されております。

18話・東の大帝国

309 飛本部 -

「大陸では陸軍ががんばってるらしいですね」

「ああ、陸上戦ともなれば海軍に出番がないからな、アルビオンの時と同じ緒戦しか活躍できないみたいだな」

タッタッタツ...

「隊長、ガリア王国から手紙です」

「どれ？」

濱口は手紙をとる。

「なに：現在我が国はロマリア連合皇国から侵略をつけている。軍はこれに対抗しているがロマリアは場違いな工芸品を多数所持している。」

幸いなことに場違いな工芸品を生産する力がない。

しかし生産できなくとも運用方法は知っている。

いくら我が軍が他国にくらべて精鋭であるとはいえ場違いな工芸品相手には

無力である：そこで場違いな工芸品を多数所持している日本軍に強力を要請する。

互いの自立の為共にがんばろう

ア王国外務省大臣」

ガリ

「なるほど…我が軍でないと抵抗できないほど場違いな工芸品…つまり兵器を

持っていてしかも運用方法まで知っているというのか」

「生産できないのが唯一の弱点…って感じですね」

「陸軍はトリステインとの戦闘でいそがしい、トリステイン攻略は陸軍に任せて

海軍はロマリア攻略を行ったほうがよさそうだな」

夜 -

「そうか、では海軍が主体となってロマリアを攻略するのでしょうか、情報をありがとう濱口中尉」

「ありがとうございます、木下少将」

こうしてロマリア王国には海軍を主体とした大規模な戦いが行われようとしていた。

ロマリア海軍を撃滅すべく帝国海軍第7艦隊の戦艦1隻 巡洋艦2隻、駆逐艦3隻、空母1隻。

戦闘299、309、そして空母の艦載機で編成されてる319飛行隊の零戦を始めとする

航空機約100機。

地上にはアメリカ軍戦車連隊のシャーマンとガリア出身の志願兵1200人、

日本陸軍3000人の歩兵、砲兵が集まった。

こうしてロマリアによるガリア侵攻を食い止めるべく日本軍は動き

出した。

7月10日…第七艦隊出航

軍艦行進曲が流れる…

がぁぁ…

強そうな軍艦と勇ましい男たちが港をでる。

第七艦隊…というわりには規模が小さく見える。

これは第二次世界大戦中、艦隊の艦船は島付近で米海軍に沈められたり

戦局の悪化に伴い引き抜かれたりしたせいである。

また引き抜かれた軍艦のほとんどがレイテ・マリアナ沖海戦で沈んでしまった。

そのためトム島に残るのは本来の戦力の端っこくらいにすぎない。

一隻でも貴重な存在となっていた。

特に一隻のみの正規空母「雷鶴」が沈んだ場合艦載機が失われてしまい航空兵力、

海軍力がかなり失われることになる。

まず戦闘299、309飛行隊がガリア政府が建設した空港に到着、ここを拠点としロマリア連合皇国の制空権を手に入れる為戦うのであった。

第七艦隊はロマリア半島の軍港を制圧する為大陸を回るよう航海した。

陸軍はトリステインの日本占領地からガリアを通り海軍航空隊と共にロマリア半島を根っこから攻略するという作戦をとった。

途中燃料の補給が困難と思われたがガリアではすでにガソリンなどの燃料の複製が可能であった。

ちなみに299、309飛行隊の基地はロマリアとの国境に近いラバウルという所に建設された。
ラバウルとは実際の世界にもある地名でありかつて日本軍航空隊の大要塞であった。

日本軍は299、309飛行隊をあわせて地名も同じであることから「ラバウル海軍航空隊」とよんだ。

ラバウル海軍航空隊本部 -

「しかし偶然だな、濱口中尉がかつて所属していた航空隊があった場所と

同じ地名なんてな」

「ええ、なんとなく懐かしい気がしますよ、名前に」

「明日からまた戦いが始まるんだな」

「そうですね」

「さて、私はそろそろ戻るとするよ」

「はい」

そういうと楠目大尉は扉を閉めて自分の寮へと帰る。

「ふう…」

コン、コン

「ん？ 入っていいぞ」

ガチャッ

扉の外に立っていたのはタバサだった

「あれ？ どうしてここに？」

「追ってきた、赤い飛行機で」

「追ってきたって…しかも赤トンボでどうやってここまで」

「燃料いれたりしまくった、やっぱりシルフィードより使えない」

「そうかい…」

「これ、差し入れ」

なんとタバサがもって来たのは寿司だった
ほかにも日本語訳の本とかはあったが…

「ど…どうしてこの世界に寿司が？む

「東にある国に学びにいった料理人の店がちかくにあった」
「これ、売ってたから、健介好きそうだし」

たしかに濱口の大好物は寿司だ、しかし東の国って？
もしかしてこの世界にも日本という国があるのか？

「あの、タバサ？」

「なに？」

「東にある国の名前って…知ってる？」

「大和帝國」

「大和帝國？…まちがいない…この世界の日本だ」

そう、この世界にも日本と同じような国はあった。
とりあえず濱口は日本地図をタバサにみせてみる

「あの、大和帝國ってこんな形の国じゃない？」

「そう」

「やっぱりだ…俺の国の異世界版だ…」

「そうなの？」

「多分、俺の国は大日本帝國っていう所だけど」

濱口は真相をさらにつきとめようとする

「そうだ！ その国、かわった人とかいないか？」

「私、行った事ない」

「…そうか」

「でもそのおじさんからいろいろ話は聞いた」

「雰囲気は厳格でピシッとしてて礼儀正しくて武士道…と変な志をもっているらしい」

そのまんま日本であつた。
さらにタバサは説明する。

「魔法はないらしい、でも東の世界の支配者らしい」
「軍隊の装備もこつちよりいいらしい」

この世界の日本は現実世界よりも早く装備の近代化が進んでいるらしく

東の世界のほとんどを領土にもっているらしい。

「でも今行き来するのは難しい」

「えっ？ なんでだ？」

「聖地を通る必要がある、そのおじさん魔法の達人だけどかなり無理して

強行突破したらしい」

「でも帰ってきた時全治一ヶ月の重症おっていた」

「簡単には突破できない」

「そうか…」

「ちなみに場違いな工芸品は聖地のあたりからよく発見される、大和帝國もこの時代のものとは思えないものを装備してる…らしい」

(…もしかして…俺たちは帰れるんじゃない?)

聖地と…大和帝國…カギはあるかもしれない

「ところで明日から戦いに行くの?」

「えっ? ああそうだよ」

「がんばって、応援してる」

「ああ、ありがとう」

「またね、健介」

ボタン…

タバサは優しい感じでまたねというと部屋から出て行った

濱口だけが知る真実、東の世界に大和帝國という超文明国がある…

(…)

(本当に、そこに突破口はあるかもしれない)

(こんな低文明世界に日本だけが突発的にすごい兵力をもっているのはなにかおかしい)

(そんなにすごかったら現実世界でも日本は鬼畜に勝っていた…)

・

・

・

(考えても無駄だな…明日も早いし寝よう…)

翌日 -

ブオオオオオ…

戦闘299、309飛行隊の戦闘機隊はガリアの国境近くにある口
マリアの軍の基地がある、

「ヒルリーニ」の制空権を手に入れる為戦闘機を飛ばしヒルリーニ
へ向かった。

ブオオオオオ…

「隊長、今回の戦いはいままでも最も厳しい戦いになるって本当ですか？」

「ああ、ロマリアは場違いな工芸品を研究してるらしくどっかで拾った兵器を

たくさん集めているらしい」

「航空機だけでも200機は集めたらしいぞ」

「そ…そんなにですか？」

「ああ、生産できるほど技術がなくなよかった、こっちは小規模ながら工場もある」

「ただし…厳しい戦いであることは避けられないな…」

「第一次世界大戦頃の古飛行機ならいいですがね…」

「隊長！　こちらこちらミタ機！右前方敵機！」

こちらに向かってくる戦闘機は運がいいことに第二次世界大戦までに開発、製造された航空機ばかりだった、戦後の高性能機は見られない。

「ん、今確認できるのは…零戦、九六艦戦、P-26、P-36、I-153 I-16 ファイトCR-42…」

たくさんありすぎる…」

「とりあえずあの中では零戦が一番手ごわそうだが倒せない相手ではない、行くぞ！」

ラバウル海軍航空隊

銀翼連ねて南の前線

揺るがぬ護りの海鷲達が

肉弾砕く敵の主力

栄えある我等ラバウル航空隊…

…ダダダダダダ…

ドガアアアアア！！！！

ブオオオオオ…ダダ…ダダダダ…！！！！！！

練度の差で大きく勝るラバウル海軍航空隊は戦闘機が相手でも引けをとらなかった。

日本軍の損害は僅かなのに対しロマリア空軍の損害は激しいものであった。

2日後陸軍はヒルリー二の基地を制圧、航空機20機を鹵獲、またラバウル海軍航空隊の活躍もあり制空権とともにヒルリー二を完全に制圧した。

一方ガリア北部ではゲルマニア軍が侵攻してきた為ガリア軍との戦闘が開始されていた。

兵士の練度と数で勝るガリア軍は自国の領土にゲルマニアの軍の足を一歩も踏ませることがなかった。

18話・東の大帝国（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております。

また作中登場した「大和帝國」は本家ゼロの使い魔には登場しておりません。

あと正規空母「雷鶴」はもちろん架空の空母です。

19話：ロマリア制圧なるか！？

濱口達が戦果をあげているその頃、第七艦隊は着々とロマリア半島へと迫っていた。

「閣下、まもなくローマに到着します」

ローマとはロマリア連合皇国の中心地、
なお現実のイタリアにあるローマとは全く関係なく場所も違う。

「そうか、ロマリア最大の都市であるあそこを占領すればこの戦いは日本にとって有利なものとなる」

「しかし、ローマにはなんでも地球産の艦艇が多数並んでいるらしい、

燃料不足により動けはしないのだがその分海に浮かぶ大要塞と化しているんだ」

「しかし、艦船や弾を生産する技術がない、
修復する技術もない、つまりはちよつと破壊すれば使い物にならなくなる」

「船を失いたくない、船は島の工場じゃ生産できない、
特にこの空母の損失が一番でかい、この空母「雷鶴らいかく」は翔鶴型航空母艦の

三番艦である、日本海軍に残された僅かな空母だ」

「失うわけにはいかない、そこで艦載機による攻撃隊を送る事にする」

ブオオオオ…

戦闘319飛行隊長上條英樹大尉

「ようやく俺らの出番のようだな」

「まったく299や309の奴らですよ、自分たちだけ活躍しやがった」

「だがここで俺たちがロマリア海軍に大打撃を与えたらそれはそれで大戦果だ、

やって後悔する戦いじゃないし俺たちだけなにもしないってわけにはいかないしな」

「よし！発艦しろ！」

ブオオオオオオオオオ…

・
・
・
・

ロマリア海軍ローマ基地総司令官アブラーモ中将

「なに！？　ほぼすべての砲塔がうごかない！？」

「はいっ！」

「敵の機動部隊が迫っているんだぞ！？　精神力で直せ！」

「ムリです！　それに兵士達の士気も低い！　戦闘はほぼ不可能です！」

「貴様は国を滅ぼしたいのか!？」

「もちろんそんな気はございません!　しかし私は現実を述べているだけで…」

「なんだと…貴様は軍事裁判に出してやるぞ!…!」

「ひいいい!!!!」

ガチャ…

「閣下!　大変です!　敵は飛行機で!」

「なんだと!？」

ドゴアアアアン!!!

燃え上がるロマリア海軍の艦艇を見てアブラーモ中將は啞然であった

「…」

「戦闘機の迎撃は?　聖地付近で手に入れた航空機が200機近くあつただろ」

「それが…」

「ほとんどが敵軍に落されてしまいました…
敵の戦闘機はこちらのよりも新しいものらしくて…」

「……」

ドオン！

アブラーモ中將は力強く机を殴る

「ええい！ 空軍の役立たず！ こうなったら船に積んである対空砲だけで

なんとかしろ！！！」

「祖国の為に死ぬ気で戦え！！！！！」

ブオオオオ…

「どういうことだ？ 反撃してこないぞ？」

ローマ軍港は航空隊の活躍でほぼ壊滅状態であった。

またロマリアは予想よりも早く内地へと敗走していったのだ。

開戦から僅か12日、首都「ロマリア連合都」が陥落。

日本・ガリア連合軍の圧勝であった。

ロマリアの敗北にはいくつかの理由があった。

まず軍需工場もなく技術もないのに「場違いな工芸品」に頼りすぎたことだ。

戦闘開始僅か6日でほとんどの弾を撃ちつくしてしまったのだ。

その程度でしかないのに古来の騎士団などはすべて解体されたのだ。

もう一つは「内戦」であった。

騎士団が解体されたことによって異教徒との内戦が勃発。
異教徒らは攻めて来た日本・ガリア連合軍の味方につきロマリアと戦った。

聖地奪還の為兵力の大半を聖地へ送っていたこと。
戦力が分散しすぎていたことも敗北の理由だろう。

一方トリステインへ出征した日本軍はロマリア降伏の日、タルブを占領した。

日本軍とトリステインの戦争はいよいよ最終局面へ突入しようとしている。

19話・ロマリア制圧なるか！？（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております。

20話・主都決戦

7月27日：日本軍とトリステインの戦いは最終局面へ突入しようとしていた。

ロマリアを制圧したことで陸軍のロマリア攻略部隊が休まずに3日間でタルブへ移動。

またアルビオン守備隊からも500名がトリステイン攻略部隊と合流。

さらに修理が完了したティガー1が日本軍戦車連隊へ。

ハリケーン戦闘機と新造bf109F1機、隼2機が陸軍航空隊へ。

その他には日本海軍戦闘299、309飛行隊が参加、二つの航空隊にも新たに発注された

零戦52型10機、さらにロマリアの空軍基地で無傷で鹵獲した零戦21型2機、

F4Fワイルドキャット3機がが配備され二つの航空隊が空中戦で失った戦闘機10機を

同じ数以上一気に補充することができた。

またそのほかにも元ロマリア異教徒やガリア出身兵、ガリア正規軍などがあつまり2万近い兵力となった。

一方第七艦隊は次なる戦いに備えトム島へ退却途中だった。

一方トリステインもすべての兵力を王都に終結。

正規軍のほかにも戦闘員として王族、貴族、平民問わずに集められ女性や10歳にも満たない少年少女、老人、勉強に忙しい学徒までが動員された。

トリステインは民衆から生活上最低限度必要なもの以外を武器を作るために回収。

さらに戦意向上の為多数のプロパガンダが作られた。

トリステイン政府が発表した曲である

玉碎絶対！

1 小国国民の皆様と

共に死ねるこの時ぞ

来る戦い勝つべしぞ

我ら全滅してもだ

やると決めたらやりぬくぞ

2 国民一丸の総攻撃

我に驚き敵は去り

その為我ら火の玉ぞ

死など恐れてなるものか

玉碎覚悟で進むべし

3 そうだ玉碎今時だ

一人一人が決死隊

お国の為に死ぬ事は

なんら恥ずべきことじゃない

何がなんでもやりぬくぞ

トリステインは大日本帝國を超えていた…玉碎精神は…

だが政府や王室内でもこの体制に反感を持つものはいた

王室 -

「女王様：今のうちに降伏すべきでは？」

「このままでは国民全員が死んでしまいます…」

「いいえ…私の政策でもトリステインは一番になることはなかった、おまけに戦争は負けることがすでにわかりきっています…」

「トリステインは一番になれなかった…だから滅びるべきなんです…それに国民も占領されて奴隷にされるより国の為に死んだほうが幸せです」

「それにこちらは英雄平賀才人を殺された…いまさら引き下がれません…」

「しかし！すでに政府関係者は名の知れたメイジ達は亡命を始めました

我が国で最も天才であるコルベール様もどこかへ亡命されて…」

「一番になれなかった国は滅びる運命しかないのです…」

ドゴオオオン！！！！

「！！！」

「女王様！日本・ガリア連合軍が王都まできました！！！！」

「トリスタニアを死守しなさい…」

「…はい」

「……」

（こんなの私の本意ではないことくらい自分でわかっている、でも今更降伏したところで私の命なんてない……国もなくなる……なら……みんな死んでしまえばいい……）

市街地 -

ダダダ…ダダダダダ…

ドウン！！！！ ドウン！！！！！！

狭い土地と大勢の兵に日本軍はなかなか進撃ができなかった。

しかし士気が完全になくなっていたトリステインの人々は次々と日本軍、あるいはガリア軍に投降していった。

8月1日午前10時半には王城を占領、まちのほとんどを占領した。

城には多数の焼死体が…王室の人たちは占領される前に皆自決した。だがトリステインの残党はトリステイン魔法学院を拠点とし戦闘を続けた。

8月正午に日本・ガリア連合軍はトリステイン魔法学院までたどりつき

最後の戦いへと突入する。

トリステイン魔法学院攻略部隊を支援する為戦闘309飛行隊は学院へ向かった。

ブオオオオオオオ...

「なんか…似てるな…」

「えっ？　なにがですか？」

「日本の末路と」

「…」

「かわいそうになってきた」

「しかし…これは」

「わかっている…戦争なことぐらい」

「許してくれ…戦争に汚いも糞もないんだ…俺たちだって鬼畜どもにボロボロにされたんだ」

濱口は敵が空を飛んでいないか索敵を開始した。

しかし竜はどこにも見当たらない。

戦艦の姿もない。

もはや竜、稼動可能な艦船はゼロであった。

しかし正面の塔に誰かが立っているのをみつけた。

「あいつは…」

ルイズだった　攻撃でもしかけるつもりか

「まちがいない、才人という日本人と一緒にいた女だ！」

その時！

ゴォ！！！！！！

「！！！！！！」

なにかが起こった…濱口機と五十嵐機ともう一機になにかが…

濱口は光が見えた瞬間意識を失う…

その後どういうわけかトリステインとの終戦がまじかになったところ。仲間であるはずのゲルマニアがトリステインに宣戦布告。

一気にロマリアとトリステインを倒した日本を恐れたのか寝返ったのである。

結局トリステインは敗北、その後ルイズはどこへ行ったのかは定かではないが

二度と人前に姿を現すことはなかった…

ある日…

彼は目覚めた

「…」

目が覚めたらそこは病室であつた。

「大丈夫？」

濱口が寝ていたベッドの隣にタバサが座っていた。

「…ここは？」

「トム島」

「俺は？」

「私が助けた」

後からタバサに話を聞いた濱口は知る、
自分が食らった攻撃は「虚無」というらしい。
タバサは間一髪で濱口を助けたという。
彼女自身も軽傷だが怪我をしていた。

カレンダーを見ると…

日本時間の1946年8月15日…終戦から丁度一年だった。

「そういえば五十嵐も虚無に巻き込まれたような…」

「助かったのは健介一人、五十嵐含む残りの三人は戦死」

「そうか…俺だけ助かったのか…」

（すまん…俺もいつかお前らの所にいくからな…）

これまでの戦いで陸海軍あわせて2850名が亡くなった。
25000人の守備隊から2850名が亡くなったのだった。

「よかった」

「ん？ なにがだ？」

「健介が助かった、今日祝ってね」

「なにを？」

「今日、私の誕生日」

「そうか、今年で何歳？」

「16」

「16か…俺が飛行機乗りにあこがれていた年頃だな。
もうあれから10年経つな…」

「でもタバサ、わるいけどたいしたお祝いはできないよ、
一瞬曲芸飛行でも見せてあげようかと思ったけど」

「この体じゃ飛行機操縦できない事に気がついたんだ」

「いい、おめでとぅって言うてくれるだけで」

「えっ？」

「あぁっ…おめでとぅ」

「ありがとう」

しかし16歳って祝われてももううれしくもない歳なのになんでタバサは、しかも何故タバサは濱口だけを助けたのか…」

ガチャッ…

299 飛の楠目大尉だ

「おっ？ 邪魔しちまったか？」

「なんでそうなるんですか…」

「だってタバサちゃんお前のこと気にいつてるみたいだし」

「それを本人の前で言うんですか…」

「ははっ それよりお前なに敬語で話してんだ？」

「はい？」

「ははっ そうだったお前寝てたんだもな、知るわけないか」
「お前、大尉に昇進したんだよ」

「ほっ…ほんとうですか!？」

「ああ、俺はあんまり活躍してなかったしお褒めの言葉すらだけだな…」

「…っ—わけで俺もお前も同じ階級だ、同期でもあるしよろしくな!」

「あっ…はい!」

「じゃああなた、あともう敬語で話さなくていいからな」

「わかってるさ」

「じゃあ、またな」

ボタン…

濱口はこれまでの戦果が認められ寝ている間に大尉に昇進したという。

20話・主都決戦（後書き）

皆様方のご感想お待ちしております。

トリスティンの作った曲の元ネタは大政翼賛会が作った「進め一億火の玉だ」というものです

21…ミッドウエーの亡霊!?

8月18日：タバサが助けしてくれたおかげでもう動くぶんにも支障がなくなった濱口であった。

「そういえばタバサ？」

「なに？」

「お前ってガリアの人間だよな」

「うん」

「帰らなくてもいいの？」

「いいの、全部兄におしつけといた」

「えっ？」

実はタバサには兄がいた、兄にすべてをまかせたという。

「だから、健介と一緒にいれる」

タバサが近寄ってくる、しまいには体をくっつけてくる

（なっ…なんだって!？）

「健介…ありがとう」

「えっ？」

「健介いなかったら、死んでた、多分」

「そうか…」

「健介…」

「なんだ？」

「好き…」

「えっ？ それ本当か？」

「うん…」

（な…なんだこの唐突な展開は？

夢か！？ そうだな、島からこんな世界に飛ばされてしまい現地の女の子に

告白されるなんて夢に違いない…戦争も終わったのに仲間も死んで行くし…）

（でも痛みは感じる…感触もなにもかもだ…おかしい…）

タバサは落ち着いた表情で濱口にくつつく…

「健介？」

「ん？ どうした？」

「健介は？ 私の事…」

「ん？ ああ…」

あまりにもありがちな展開に濱口は困るのだった、

しかし女の子を傷つけてはならないと教育されさらに今は亡き同期の五十嵐が

好みそうなタイプである、嫌いといえはのろわれるだろう…

濱口自身も女の子と付き合うのが夢であり彼女いない暦〓年齢の彼にとって

チャンスでもあった。

「ああ、タバサ」

「俺はお前が好きだ…」

言っちゃったのであった…もう彼女いない暦〓年齢とはおさらばだ。タバサは目をつぶりキスをしようとしていた…

「！？」

（なんだと！？ そこまで俺の事を好きだったのか…この短期間で…俺のどこにホレたんだ！？）

（俺は確かにカッコイイとは言われていたがそこらにいる普通の日本男児だ、

とくに変わったところもなく軍内の階級もたいしたことはない）
（でも…何故だ…おれもこいつの事が…嫌いになれない…好きなのかもな…）

濱口もキスをしようとした…だが…！！

コンコンッ

「！！」
「！！」

二人はもうすこしでキスするところだったがノックの音でやめた。

「は…入れ…」

ガチャ！

入ってきたのはガダルカナル戦より俺の部下であったミタだ
戦闘309飛行隊の副隊長として、また若鷺の教官として今は働いている。

「隊長！ 本日の訓練！ 終わりました！」

「そうか…では伝えておけ、本日はこれにて解散と」

「はい！」

ボタン…

「タバサ…ここは危険すぎるな」

「うん…我慢する」

二人は学習した、軍の施設で恋愛は危険だと…

しばらく二人は黙り込む…とあるときタバサが話しかけてきた

「健介？」

「なんだ？」

「ハルケギニア世界大戦が終わったから…今度は…行くの？」

「行くの…ってどこに？」

「東の大帝国…大和に」

そつ…濱口が睨んだ東の世界にある大帝国「大和」
そこに日本帰還の鍵があると濱口は睨んでいた。

「ああ…帰れないにしても…興味はあるよ」

「じゃあ…いく？」

「えっ？ でもまだ皆支度ができてないし…」

「私たちだけで」

「いやあそういうわけにもいかないよ、
逃亡者には厳しい刑が待っているし」

「でも…行きたい…よね？」

よね…ってなんだろう。

しかし濱口は東の世界に行ってみたいとは思っていた。

「ああ…うん」

「でも…島の全兵力でいくのは難しい」

「戦車とか飛行機なら陸からいけるし補給も可能、でも船はムリ」

タバサは俺たちといっしょにいる時間がほかのハルケギニアの人より長いため

ハルケギニア出身の軍人以外では一番現実の世界に詳しいのであった。

「…だったら…その船で俺たちがいけばいい」

「えっ？」

「たしかに大変だとは思うけどこの島の兵器はすべて内地から輸送されたものだ。

大艦隊でいけば遠くてもなんとかなる」

「それにガリアの魔法使いを一人つれていけば燃料とかは一滴でもあれば何百倍何千倍にまで 復元できるんだろ？」

「うん」

「全兵力を輸送するにはいい案だと思うけど…その船がないよね…」

「ある」

「えっ？本当なのか？」

「ガリアには輸送船が沢山…船全部使えば多分この島の全兵力を載せる事もできる」

「それはありがたいけど…飛行機は空母がないと…」

陸軍機には関係ないけど海軍機は空母に乗せておけばいつでも出撃できるんだ」

「でもその空母は「雷鶴」しかない」

「まあすべての海軍機つてわけじゃないけどね」

「空母？ 雷鶴？ 平たい船？」

「うんそうだよ」

「あれもある、この近くに」

「うそ…だろ？」

「4年前の6月7日、ガリアと旧トリスティンの国境に大きな平たい船が四隻…」

「本当か？ ここから何キロ？」

「500」

「この島の飛行機の航続距離で充分間に合う…いってみよう」

こうして二人は四隻の空母と思われる船があるガリアと旧トレスティンの国境付近にある
海沿いの漁村へとむかった。

零戦は一人乗りであるためかわりに同じく航続距離が長くまた戦闘

機であるため

戦闘が可能な夜間戦闘機「月光」に乗り向かった。

・
・
・

ブオオオオオオオ...

「楽しい」

「そうか？」

「健介と一緒に飛行機乗るの」

「そうか」

「綺麗な海だな」

「海水浴でもしたくなるね、健介」

「そうだな」

最も濱口は海軍、海なんて珍しくもなかった

「ところでタバサ、四年も海に放置してあるんだろ？
ボロボロになってないか？」

「大丈夫、固定化の魔法がかけられてある」

「固定化？」

「うん」

「固定化の魔法をかけると朽ち果てる事はなくなる」

「そうなんだ」

「見て健介、あれだよ」

「ん？」

「！！」

濱口は四隻の船を見てびっくりした…

「あれは…赤城…あつちには加賀…飛龍と蒼龍まで…」

「全部ミッドウェーで沈んだ…海軍の正規空母だ…」

「なんでこんな所に…」

そう…実は赤城・加賀・飛龍・蒼龍の正規空母四隻は沈んでなかった。

沈んだと思ったら…ここハルケギニアに召喚されただけだったのだ…

それが後の日本敗北へと繋がった…という

「…健介？」

「まちがいない…これはミッドウェーで沈んだ四隻の正規空母だ」

「？」

「でも…これさえあれば俺たちは大和帝國へいける」
「四隻は流石に多すぎる気がするけど…」

21・ミッドウエーの亡霊!?(後書き)

皆様方のご感想お待ちしております。

22話・帝國海軍vs帝國海軍！？

海軍司令部・

「…ということですよ！」

「そうか、すごいものを見つけたな濱口大尉」

「はいっ！」

「だが…空母四隻を動かせるほど我が軍には兵員がないのだよ」

「そ…そうですね…」

「でもだ、そこにあつた空母二隻と雷鶴さえあれば海軍の航空機の運搬は可能だ

それにガリアのタバサの話ではガリア海軍の輸送船全部貸すって
いってたし全部必要というわけではないだろう」

「私としては赤城と加賀と雷鶴をあわせればいいと思うのだ」

「えっ？ では残り二隻は」

「ふむ、ガリアと我が国の友好の為飛龍と蒼龍はガリアにプレゼント
ント

することにしよう」

「いつ…いいのですか？」

「どうせ我が軍は今の状態でも精一杯で一隻でも空母が増えたら運

用ができない」

「あの二隻はガリアから人がきてくれることを想定しての導入予定だ」

その後約束どおり赤城と加賀を運用してくれるガリア人が派遣された。

その他の艦艇の兵員不足もこれらによって解決された。

このガリア人は皆職を失った者であり仕事がいっただときは歓喜したという。

戦艦2隻 巡洋艦3隻、駆逐艦5隻、空母3隻 陸軍揚陸艦1隻とガリア輸送船多数による大艦隊が編成された。

8月25日：

ザアアアア…

濱口は空母赤城に乗り込んだ

濱口は甲板の先頭でタバサと話していた。

「もう…夏も終わりだね」

「ああ」

「来年…海水浴いこ？」

「ああ、いいよ」

「そういえば、聖地の件は？」

「ん？」

「健介、聖地もいきたいって…」

「聞く話だと…いったらただじゃ済まされそうにないからな…
これ以上人を死なせるわけにもいかないし」

「そうだね」

「そんな事も考えて俺は海上を移動すればいいと思ったんだ」

「そうなんだ」

「…」

「へくちよ！！！！」

「フツ　かわいらしくしゃみ」

「いったな」

「甲板は結構寒いからな、そろそろ中入ったほうがいいと思うよ」

「うん」

空母の中 -

「そついえばガリアの輸送船ってどのくらい速度出るの？」

「巡航速度は17ノット」

「結構なものだね、じゃあすぐ大和帝國につきそうだね」

ガリア海軍の力を借りての島の全兵力を輸送する大規模な作戦…
木下中将率いる木下機動部隊は順調に大和帝國へとむかっていた…

ハルケギニアの地図で現実世界という南アジア付近でのことだった…

時は9月…ガリアの魔法使いのおかげで燃料にはこまらなかった。
また食糧も港町で買うことができた。

そう9月のある日だった…

ドン！！！！！！

ドシャアアアア！！！！

「なんだ！？」

一人の兵士が爆音と波の音で気がつく。

外を見ると…軍艦だ…それも煙突から煙がでている…動力がエンジンの軍艦だ！

「…旭日旗？…連合艦隊！？」

どうも日本の船くさい船がこちらに攻撃をしてくる。

「自衛戦闘を行う！ 総員各位置につけ！」

ブロロ…ブロロロ…！！！！！！

「発艦を許可する！」

ブオオオオ…

「健介！！！」

「大丈夫だタバサ、すぐ戻ってくる」

ブオオオオ…

濱口大尉の零戦が飛び上がる…それに続く航空機も飛んでゆく…

ブオオオオオオオ…

「あつ！ あぶない！！！」

ドゴオオオオオン！！！！！！

空母赤城 -

「被弾しました！」

「被害は！？」

「浸水です！」

「右舷注水！！！」

「大丈夫だ！ 赤城はまだ動ける……」

289、299、309、319 飛行隊 -

「よし！ 敵艦に攻撃開始！」

「待て！ 敵艦は攻撃をやめた！」

「なんだと！」

「退却していく！」

「どういうことだ！？ 数的に相手のほうが有利なはずだ」

空母赤城 -

「敵艦は攻撃をやめた」

「閣下！ 上を！」

「！！！」

向こうから何かが飛んできた…オートジャイロだ！

「馬鹿な！ この世界にあんなものが存在するわけ」

そのオートジャイロの色は白くそして日の丸に剣が描かれていた。

恐らく日本武尊の剣と日の丸をあわせたのだろう…

オートジャイロは空母赤城に着艦した
木下中將が艦内からでてくる。

タツ…

「言葉…通じますか？」

オートジャイロから降り立った男は日本語をしゃべった。

「ああ、通じますよ」

「あなたがこの船の…」

「ええ、この艦隊の指揮官でもあります木下も申します」

「先ほどはすみませんでした、旭日旗を見るまで敵艦かと」

「実を言えば我々は貴方達の国の人間ではないのですが」

「…といえますと？」

「少々信じられないことでしょうが我々は突如神隠しにあいこの世界にきてしまった。」

しかし、ある事に気がついたのです」

「我々は大日本帝國という所からきました」

「大日本帝國？」

「我々の世界にある国で我々の祖国です」

「その大日本帝國がある場所と、貴方達大和帝國のある位置が一致していたのです」

「なるほど」

「そんなことを言って我が国に幾人の人間がきたな…」

「なんですって？」

「ここ数百年くらいはみないのだが…その人たちのおかげで大和帝國は

現代化が進んだのです」

「そう…大和帝國に漂流した方々のおかげで」

「なるほど」

「話はあとでゆっくりききたいのですがそのオートジャイロをよけてくれませんか？ 艦載機が着艦できないのです」

「ほう オートジャイロを知っていたとは…」

「わかりました直ちによけます」

その後艦載機は着艦し大艦隊は近くの軍港に行った…

22話・帝國海軍vs帝國海軍!?(後書き)

皆様のご感想お待ちしております

最終回・大和帝國へ

軍港 -

「…なるほど…そういうわけですか」

「文明レベルのひくいこの世界にただひとつずば抜けた国がある理由がわかりました。」

木下中將と高野と名乗る軍人は親しげに話していた。

一方濱口は…

「…」

コンコンッ

「ん？ 誰だ？」

ガチャ…

「健介…」

「タバサか どうした？」

「寂しい」

「ちょ…甘えっ子だなタバサは」

「うん、いいでしょ」

「いいよ」

「健介？」

「なんだ？」

「大和帝國に行ったらどうする？」

「元の世界に返れるなら戻るさ」

「私も…行つていい？」

「国の事は姉に任せたんだろ？ 別に問題はないと思うよ」

「ありがとう…」

「おやすみ、健介」

「ああ、おやすみ」

ボタン…

（船旅にもいい加減つかれてきた…もうすこしで大和帝國だな）

翌日 -

再び出航…大和帝國海軍へは連絡がいきとどいたらしい。
誰が普及させたか大和帝國には電話まであるという。

そして…

9月も末、ゆつくりとした旅は終わろうとしていた。

帝都「大和」へと到着「大和」とは東京がある所にある都らしい。

船から出ると…

「かわった町」

タバサはうれしそうな顔で言った
それに濱口は答える

「タバサはこういうところ始めてだからな」

町を歩いていると…なつかしい気分になった

並木の道路…この木には春になると桜が満開になるらしい。

町は西洋風の建物が並び馬車や車が走っている。

和服と洋服をきた人がいて海をみると築堤の上に小さな蒸気機関車が走っていた。

町の雰囲気は明治時代といった感じた。

「きれい…」

タバサはよろこんでいた

「懐かしい感じがする」

「どうして？」

「こういうかんじの国出身なんだ」

「そうなんだ、大日本帝國ってこんな感じの国なんだ」

一方陸軍は…

「すっげええええ」

「鉄の馬だ…」

「こ…こしが抜けた…」

「おい！ 大和の飛行機より早くとんでるぞ！」

「あわわわわ…」

街中を戦車で走行し上空には陸軍航空隊の飛行機を飛ばしていた為
大和帝國の国民からめずらしがられていた。

国会議事堂前 -

ここで陸海軍が合流した。

議事堂前には滑走路がありそこに航空機はおりる…

「…そのまんまだ…日本のそのまんまだ…」

タッタッタ…

「ようこそ大和帝國へ」

「えっ？」

「私は大和帝國第十代内閣總理大臣三田村萩尾と申します」

「はっ 私は大日本帝國陸軍トム島守備隊總司令官石原宗一郎でございます！」

「では…こちらへ」

「よし、ここからは私一人で行く、ほかの者は5時までここに集合すること、
では一時解散！」

「はい！」

タッタッタッ…

その後石原達は首相官邸へと移動した。

「さて…あなた方の目的は現実世界に戻る…ということですね」

「ええ、何故ご存知で？」

「何度か過去にそういう人たちがきています」

「そうなのですか？ それで戻れた人は？」

「誰一人といません、帰還は不可能です」

「そ…そんな…」

（折角ここまでこれたというのに…これからどうすれば…）

一方濱口達は・

「二人きりだね」

「ああ」

「初デート…かな？」

「多分な」

「おっ？ あれは本場の寿司屋か」

「えっ？ 寿司屋？」

「この前のお礼だよ、俺のおごりで食べさせてあげる」

「ありがとう」

寿司屋・

「おいしい？」

「うん、この赤いのが」

「鮪だよ」

「私これ好きになった」

「あんまり食べてると通風になるよ」

「つーふー？」

「贅沢病…かな？」

「へえ」

「でもタバサちゃんはまだ若いから大丈夫だよ」

「そうなんだ」

「だから遠慮なく食べてね」

「うん」

そして約束の5時 -

「…みんな…落ち着いて聞いてほしい」

「…」

「…」

全員が沈黙する

「どうやら…帰還は不可能らしい」

「なっ…なんだって!？」

「しかし…今更トム島に戻るのも…めんどくさい話だ」

「こんなこともあるのかと皆に自由時間を与えた、
どうだ？大和帝國は？」

ほとんどの者は落ち着いたと答えた。

「ならば…しばらくの間この大和帝國にすまないか？」

「ええ！？」

「ここには食糧も沢山ある、燃料もある」

「工場だってある、これほどの基地は存在しない」

「どうかね？」

皆意義はなかった。

こうして日本軍トム島守備隊は「大和特殊戦闘軍」として活動することになり

国は何故か熱海に基地を造った。

とある無人島からこの世界に来てから1年とちょっと…元の生活と「似た」ような生活にもどれた。

戦闘も経験したが幸いな事に玉砕というほど死者はでなかった。

ちなみに大和帝國の正規軍は志願制軍隊であった
そんな事はどうでもいいけど。

その後 -

濱口は26歳という若さで軍を退役、もう懲りたのだろう

またタバサが16歳と既に結婚が認められる歳であった為濱口健介とタバサは

12月24日、クリスマス・イブに正式に結婚した。

熱海の山岳部に家を建て退役後すぐに「大和特殊戦闘軍」から零戦52型と九七式艦上攻撃機を

一機もらったのでガリア兵に1200メートルの滑走路を造らせガリアの魔法使いに

固定化の魔法をかけさせた。

ミタは隊長である濱口が退役したので新たに戦闘309飛行隊の隊長になった。

ディートリヒ・ケンペル少佐は熱海にある軍需工場の総責任者になり兵器の大量生産を行えるようにした。

ジョン・ゲンガー大佐は独自に「在大和特別機甲師団」という部隊をつくり

国から金をもらい大和の治安維持活動にあたっている。

木下四郎は軍人を引退、第七艦隊は高野中将が指揮をとることになった。

男たちの戦いは終わった…終戦から1年後に…

残念ながら亡くなった方もいたが…

それでも大半が生き残り…平和な生活を営んでいる

それでいいのだろう

めでたいっばい

終…と思ったら大間違い！ 続きがあつたりなかったり
とにかく第一部たるものはこれで完…

最終回・大和帝國へ（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

外伝やら続きやら

またこれとは別な話を書いたりするんで以後もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1650h/>

あゝ皇国の零

2010年10月10日10時20分発行